

平成9年度(第26回) 農林水産業協力 プロジェクト・リーダー会議

会議期間：平成10年1月29日～平成10年2月10日

- A. アジア・大洋州地域
(平成10年1月29日～平成10年2月6日)
- B. 中近東、アフリカ、中南米、東欧地域
(平成10年2月2日～平成10年2月10日)

平成10年3月

JICA LIBRARY



J 1147268(5)

国際協力事業団
農林水産開発調査部
農業開発協力部
林業水産開発協力部

平成9年度(第26回)農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議

平成10年3月

000
807
ADD
BRARY

農開計
CR(3)
98-20

平成9年度(第26回)
農林水産業協力
プロジェクト・リーダー会議

会議期間：平成10年1月29日～平成10年2月10日

- A. アジア・大洋州地域
(平成10年1月29日～平成10年2月6日)
- B. 中近東、アフリカ、中南米、東欧地域
(平成10年2月2日～平成10年2月10日)

平成10年3月

国際協力事業団
農林水産開発調査部
農業開発協力部
林業水産開発協力部



1147268(5)

序 文

農業開発協力部、林業水産開発協力部が所管するプロジェクト方式技術協力の実施中のプロジェクトで、開発途上国に派遣されている専門家チームのリーダーと各省庁関係者、当事業団関係者等が一堂に会し、各プロジェクト現状、運営上の問題点やその対応などについて、相互に経験の交流や情報・意見の交換を行い、これら協力事業の円滑かつ効果的な運営に資することを目的として開催される本会議は、1971年以降毎年開かれており、本年で26回目となりました。

プロジェクト方式技術協力は、案件数増加と、その内容についても年々多岐にわたり、多様化、ソフト化、グローバル化などの進展に伴う当事業団の事業実施方針や、それに基づく平成10年度の子算原案、計画などを中心に精力的に討議、検討が行われました。

また、プロジェクト方式技術協力とその連携のあり方を指向する目的で南米の三農業総合試験場の場長及び開発協力事業の実証調査プロジェクトのリーダーに本年も参加頂くことになりました。

この報告書で取りまとめましたとおり、今回各リーダーからのご意見や御要望については、より効果的・効率的な国際協力を実施していくための貴重な提言・情報として、可能な限り迅速にフィードバックしていくとともに、継続的な検討課題については、これら意見を反映した、効果的・効率的協力を繋がる改善のための努力を予算要求などで具体化していきたいと考えております。

最後になりましたが、今年度の会議開催にあたってご尽力頂きました、関係各省庁、関係プロジェクトの皆様並びに関係者などに対し、心より御礼申し上げます。

平成10年3月

国際協力事業団
農業開発協力部

部長 戸水康二

目 次

序 文

(1) 平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議実施要領	1
(2) 平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議関係省庁・本部出席者一覧表 ..	3
(3) 会議詳細日程表	10

－農林水産業協力全体会議－Ⅰ(平成10年2月2日(月))－

1. 開会、出席者紹介、主催者あいさつなど	19
2. 関係各省あいさつ	22
①農林水産省	23
②外務省	26
③文部省	28
3. 平成10年度プロジェクト運営の基本方針について	30
4. 平成9年度事業実績及び平成10年度事業実施方針	34
5. 午前の部に対する質疑応答	42
6. 関係事業部説明	50
①プロジェクトの経理	50
②機材調達について	57
③C/P研修について	63
④専門家福利厚生について	73
⑤開発調査、開発協力について	79
7. 午後の部に対する質疑応答	84
8. 分野別分科会の討議テーマについて	92

－農林水産業協力全体会議－Ⅱ(平成10年2月4日(水))－

1. 意見交換会概要説明	97
2. 分野別分科会検討結果報告及び討議	103
テーマⅠ. 「農民が利用可能な技術の開発・研究」	103
テーマⅡ. 「小口融資制度の活用による技術の普及」	105
テーマⅢ. 「住民参加による地域開発」	108

テーマⅣ、「広域技術協力の展開手法」	112
テーマⅤ、「プロジェクト間の連携をどう進めるか」	114
3. 要望事項取りまとめ	116
4. 総括質疑	117
5. 会議総括	118
6. 閉会のあいさつ	126

付属資料：平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議

分野別分科会討議結果(総論)取りまとめ

分科会1. 「農民が利用可能な技術の開発・研究」(改定)	129
分科会2. 「小口融資制度の活用による技術の普及」	132
分科会3. 「住民参加による地域開発」	133
分科会4. 「広域技術協力の展開手法 分科会討議メモ」	136
分科会5. 「プロジェクト間の連携をどう進めるか」	138

(1)平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議実施要領

1. 目的

農林水産業に係るプロジェクト方式技術協力事業について、各プロジェクトの現状、問題点及びそれらへの対応策などの検討並びに相互の経験交換を行い、すべてのプロジェクトに共通する問題点などについての討議を行うとともに、平成10年度の事業計画などについての検討を行い、もって農林水産業協力事業の円滑かつ効果的な推進に資することを目的とする。

2. 開催時期及び開催場所 (別紙 会議日程表参照)

・全体期間 平成10年1月29日(木)～平成10年2月10日(火)(13日間)

(1) 農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議全体会議

〈アジア・大洋州地域のプロジェクト〉

1月29日(木)～2月6日(金)(9日間)

〈中近東・アフリカ・中南米・東欧地域のプロジェクト〉

2月2日(月)～2月10日(火)(9日間)

- | | |
|---------------------------|---------------|
| ① 農林水産業協力プロジェクト全体会議 | : 2月2日、2月4日 |
| ② 農林水産業協力プロジェクト分野別会議 | : 2月3日 |
| ③ プロジェクト関連国内委員会 | : 1月29日～2月10日 |
| ④ プロジェクト個別会議 | |
| ・アジア・大洋州地域のプロジェクト | : 1月29日～30日 |
| ・中近東・アフリカ・中南米・東欧地域のプロジェクト | : 2月9日～10日 |

(2) プロジェクト方式技術協力全体会議(企画部主催) : 2月4日

(3) 開催場所: 国際協力事業団本部及び国際協力総合研修所

3. 出席者(別紙 出席リーダーなど一覽参照)

- | | |
|---------------------|-------|
| (1) プロジェクト・リーダー | : 82名 |
| ① アジア・大洋州地域 | : 47名 |
| ② 中近東・アフリカ・中南米・東欧地域 | : 35名 |

(原則として、平成9年12月1日以前に開始し、平成10年5月1日以降に終了するプロジェクトで農業開発協力部長、林業水産業協力部長が承認するプロジェクトのリーダーを

対象とする。南米3農業試験場、フォローアップのプロジェクトは対象とするが、アフターケアは対象としない。）

(2) 各省関係者(外務省、文部省、農林水産省など関係省)

(3) 国際協力事業団本部関係者

4. 会議形態(農林水産業協力のみ)

(1) 全体会議

- ① 事業実績と事業方針
- ② 平成10年度予算政府原案(概算要求)
- ③ 農林水産業協力に係る関連事項
- ④ 関係各部報告(経理部、調達部、研修事業部、派遣事業部など)
- ⑤ プロジェクトの現況報告
- ⑥ 分野別分科会結果報告及び全体討議
- ⑦ 要望事項取りまとめ
- ⑧ 総括質疑など

(2) 分野別分科会

特定議題(共通討議テーマ)討議

(3) 個別協議

平成10年度事業計画などに係るプロジェクト関係各部との協議

(4) プロジェクト関連国内委員会

以上

(2) 平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議
関係省庁・本部出席者一覧表

1. 外務省

NO.	省 庁	氏 名
M-1	経済協力局技術協力課 企画官	塩尻 宏
M-2	経済協力局技術協力課 課長補佐	橋 政行

2. 農林水産省

NO.	省 庁	氏 名
M-3	農林水産審議官	東 久雄
M-4	経済局国際部国際協力計画課 課長	中川 坦
M-5	経済局国際部国際協力計画課 課長補佐	須藤 高良
M-6	経済局国際部技術協力課 課長	清水 徹
M-7	経済局国際部技術協力課 課長補佐	米野 篤廣
M-8	経済局国際部技術協力課 海外技術協力官	井原 昭彦
M-9	経済局国際部技術協力課 海外技術協力官	早川 雄司
M-10	経済局国際部技術協力課 海外技術協力官	田熊 秀行
M-11	経済局国際部技術協力課 プロジェクト管理係長	小原 修
M-12	経済局国際部技術協力課 プロジェクト企画係長	新名 清志
M-13	統計情報部企画調整課国際統計室 課長補佐	青山 元吉
M-14	統計情報部企画調整課国際統計室 技術協力係長	池田 龍起
M-15	構造改善局建設部設計課 海外技術基準係長	渡部 和弘
M-16	農産園芸局農産課 課長補佐	高島 友三
M-17	農産園芸局農産課 課長補佐	安達 武史
M-18	農産園芸局農産課 企画係長	福田庄二郎
M-19	農産園芸局農産課 派遣指導係長	岡田 秀樹
M-20	農産園芸局蚕糸課 課長補佐	長岡 明
M-21	農産園芸局蚕糸課 普及指導官	土屋 博

NO.	省 庁	氏 名
M-22	畜産局畜政課 国際経済係長	藤澤 眞一
M-23	食品流通局総務課 課長補佐	大坪 正人
M-24	技術会議事務局 課長補佐	中野 正久
M-25	技術会議事務局 国際機関研究係長	上田 泰史
M-26	技術会議事務局 技術協力係長	坂 治己

3. 林野庁

NO.	省 庁	氏 名
M-27	林野庁指導部計画課海外林業協力室 課長補佐	柴田 晋吾

4. 水産庁

NO.	省 庁	氏 名
M-28	水産庁国際課海外漁業協力室 課長補佐	平野 智己
M-29	水産庁国際課海外漁業協力室 技術協力係	渡辺 浩二

5. 文部省

NO.	省 庁	氏 名
M-30	学術国際局国際企画課教育文化交流室 海外協力官	武田 良正
M-31	学術国際局国際企画課教育文化交流室 文部事務官	保明 昌恵

6. 国際協力事業団

NO.	国際協力事業団	氏 名
J-1	副 総 裁	眞鍋 武紀
J-2	理 事	小澤 大二
J-3	理 事	亀若 誠
J-4	参 与	神足 勝浩
J-5	専門技術嘱託	菊池 雅夫
J-6	経理部財務第1課 課長代理	三浦 和紀
J-7	調達部管理課 課長代理	立場 正夫
J-8	研修事業部管理課 課長代理	浅野 哲
J-9	派遣事業部技術者管理課 課長	松野 裕

NO.	国際協力事業団	氏名
J-10	農林水産開発調査部 部長	鶴見 和幸
J-11	農林水産開発調査部 次長	狩俣 茂雄
J-12	農林水産開発調査部計画課 課長	澤田 清
J-13	農林水産開発調査部農林業投融资課 課長	小松 電玄
J-14	農林水産開発調査部農林業投融资課 課長代理	今井 史夫
J-15	農業開発協力部 部長	戸水 康二
J-16	農業開発協力部計画課 課長	斉藤 寛志
J-17	農業開発協力部計画課 課長代理	佐藤 保雄
J-18	農業開発協力部計画課 課長代理	内海 晋
J-19	農業開発協力部農業技術協力課 課長	中原 正孝
J-20	農業開発協力部農業技術協力課 課長代理	岩谷 寛
J-21	農業開発協力部農業技術協力課 課長代理	佐佐木健雄
J-22	農業開発協力部畜産園芸課 課長	鍋屋 史朗
J-23	農業開発協力部畜産園芸課 課長代理	向井 一朗
J-24	農業開発協力部畜産園芸課 課長代理	熊谷 法夫
J-25	林業水産開発協力部 部長	黒木 亮
J-26	林業水産開発協力部計画課 課長	高橋 嘉行
J-27	林業水産開発協力部計画課 課長代理	相葉 学
J-28	林業水産開発協力部林業技術協力課 課長	鈴木 忠徳
J-29	林業水産開発協力部林業技術協力課 課長代理	岩崎 薫
J-30	林業水産開発協力部水産業技術協力課 課長	奥野 勝
J-31	林業水産開発協力部水産業技術協力課 課長代理	吉田 勝美
J-32	筑波国際センター 次長	永井 和夫

平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議リーダーなど出席者一覧

1. 農業分野のプロジェクト

アジア、大洋州地域 (グループA) 農業分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
A-1	フィリピン	畑地灌漑技術開発 (II)	93.05.28 ~ 98.05.27	伊賀 津二 井上 淳二	96.06.15 ~ 98.06.14
A-2	フィリピン	土壌研究開発センター (II)	95.02.01 ~ 00.01.31	芳賀 道生 関 道生	97.01.15 ~ 99.01.14
A-3	フィリピン	農業モニタリング体制改善	97.03.31 ~ 02.03.30	村ノ 光 風野 光	97.03.31 ~ 99.03.30
A-4	フィリピン	高生産性稲作技術研究	97.08.01 ~ 02.07.31	橋本 均 高橋 均	97.08.01 ~ 99.07.31
A-5	フィリピン	ポホール総合農業振興	96.11.11 ~ 01.11.10	伊藤 尚樹 井口 尚樹	96.11.11 ~ 98.11.10
A-6	フィリピン	農村生活改善研修強化	96.06.15 ~ 01.06.14	伊藤 美智子 岩崎 美智子	96.12.03 ~ 98.12.02
A-7	インドネシア	灌漑排水技術改善	94.06.10 ~ 99.06.09	清水 真幸 マツ 真幸	94.06.14 ~ 98.06.13
A-8	インドネシア	農水産業統計技術改善	94.10.01 ~ 99.09.30	石井 琢磨 伊 琢磨	97.10.01 ~ 99.09.30
A-9	インドネシア	大豆種子増殖・研修	96.07.01 ~ 01.06.30	関谷 長昭 関 長昭	96.07.01 ~ 98.06.30
A-10	中国	灌漑排水技術開発研修センター	93.06.10 ~ 98.06.09	関 光男 関 光男	97.05.25 ~ 98.06.09
A-11	中国	湖北省江漢平原四湖灌漑水地域総合開発	97.01.10 ~ 02.01.09	谷 宏則 谷 宏則	97.09.08 ~ 99.09.07
A-12	スリ・ランカ	ガンパハ農業普及改善	94.07.01 ~ 99.06.30	安延 義弘 安延 義弘	97.06.15 ~ 99.06.30
A-13	スリ・ランカ	植物検疫所	94.07.01 ~ 99.06.30	池上 雅春 池上 雅春	94.07.01 ~ 98.06.30
A-14	タイ	東部タイ農地保全	93.06.10 ~ 98.06.09	境 忍 境 忍	96.06.02 ~ 98.06.09
A-15	タイ	チェンマイ大学植物バイオテクノロジー研究	93.08.01 ~ 98.07.31	谷口 武 谷口 武	96.09.15 ~ 98.07.31
A-16	ラオス	ヴィエンチャン県農業農村開発 (II)	97.11.01 ~ 02.10.31	堀江 實信 堀江 實信	(95.11.01) ~ (97.10.31) 97.11.01 ~ 98.03.31
A-17	ミャンマー	灌漑技術センターF/U	88.04.01 ~ 99.03.31	龍田甚右衛門 龍田甚右衛門	95.09.16 ~ 99.03.31
合計				7か国	17プロジェクト

中近東、アフリカ、中南米、東欧地域 (グループB) 農業分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
B-1	ブラジル	ピラール南部地域農村開発	94.07.01 ~ 99.06.30	村山 忠一 村山 忠一	94.07.02 ~ 98.07.01
B-2	ブラジル	大豆生産技術研究	97.10.01 ~ 02.09.30	橋本 鋼二 橋本 鋼二	97.10.01 ~ 99.09.30
B-3	ホンデュラス	灌漑排水技術開発	94.10.01 ~ 99.09.30	海老原 洋司 海老原 洋司	97.02.15 ~ 99.02.14
B-4	ブラジル	セラード農業環境保全研究	94.08.01 ~ 99.07.31	山下 忠明 山下 忠明	97.07.28 ~ 99.07.31
B-5	メキシコ	モレロス州野菜生産技術改善	96.03.01 ~ 01.02.28	磯川 林蔵 磯川 林蔵	96.03.04 ~ 98.03.03
B-6	タンザニア	キリマンジャロ農業技術者訓練センター	94.07.01 ~ 99.06.30	鯉淵 登 鯉淵 登	94.07.04 ~ 98.07.03

NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
B-7	ガーナ	灌漑小規模農業振興	97.08.01 ~ 02.07.31	フジノ 隆之 辻本 義之	97.08.15 ~ 99.08.14
B-8	ルーマニア	灌漑システム改善	96.03.01 ~ 01.02.28	フジノ 隆之 安養寺 久男	96.04.01 ~ 98.03.31
合計		7か国	8プロジェクト		

2. 畜産・園芸分野のプロジェクト

アジア、大洋州地域 (グループA) 畜産・園芸分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
A-18	中国	河北省飼料作物生産利用技術向上	95.04.01 ~ 00.03.31	フジノ 藤田 和夫	97.08.01 ~ 99.07.31
A-19	中国	内蒙古乳製品加工技術向上	94.06.01 ~ 99.05.31	村ノ 小澤 周司	97.05.16 ~ 99.05.15
A-20	タイ	国立家畜衛生研究所 (II)	93.12.09 ~ 98.12.08	村ノ 古内 進	94.04.01 ~ 98.12.08
A-21	タイ	中部酪農開発	93.08.01 ~ 98.07.31	村ノ 高橋 謙	95.07.25 ~ 98.07.31
A-22	モンゴル	家畜感染症診断技術改善	97.07.01 ~ 02.06.30	ゴトウ 後藤 仁	97.10.25 ~ 98.11.24
A-23	ミャンマー	シードバンク	97.06.01 ~ 02.05.31	ワハバ 渡辺 進二	97.10.08 ~ 98.10.07
A-24	ハンガリー	家禽管理技術改良	97.11.01 ~ 02.10.31	伊マ 岩間 達夫	97.12.02 ~ 99.12.01
A-25	インド	二化性養蚕技術実用化促進	97.04.01 ~ 02.03.31	初ノ 河上 清	97.04.10 ~ 99.04.09
A-26	マレーシア	未利用資源飼料化	97.03.15 ~ 02.03.14	村ノ 早川 博文	97.04.10 ~ 99.04.09
A-27	インドネシア	酪農技術改善	97.03.03 ~ 02.03.02	村ノ 中林 勉	97.03.03 ~ 99.03.02
A-28	パキスタン	植物遺伝資源保存研究所	93.06.01 ~ 98.05.31	村ノ 蒲生 卓磨	95.09.25 ~ 98.05.31
A-29	ネパール	園芸開発 (II) F/U	97.11.12 ~ 99.11.11	ミタ 富安 功一	97.11.14 ~ 99.11.12
合計		10か国	12プロジェクト		

中近東、アフリカ、中南米、東欧地域 (グループB) 畜産・園芸分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
B-9	ウルグアイ	獣医研究所強化	96.10.01 ~ 01.09.30	村ノ 井上 忠恕	96.10.01 ~ 98.09.30
B-10	ウルグアイ	果樹保護技術改善	95.03.01 ~ 00.02.29	村ノ 尾形 亮輔	97.04.16 ~ 99.04.15
B-11	パラグアイ	小農野菜生産普及強化	97.04.01 ~ 02.03.31	村ノ 石島 敏	97.04.02 ~ 99.04.01
B-12	ブラジル	南ブラジル小規模園芸研究	96.12.01 ~ 01.11.30	村ノ 柳瀬 春夫	96.12.02 ~ 98.12.01
B-13	ドミニカ共和国	山間傾斜地農業開発	97.09.01 ~ 02.08.31	村ノ 矢澤 佐太郎	97.09.01 ~ 98.05.12
B-14	ボリビア	肉用牛改善	96.07.01 ~ 01.06.30	村ノ 田谷 昭	96.09.04 ~ 98.09.03
B-15	アルゼンティン	植物ウイルス研究	95.03.01 ~ 00.02.29	村ノ 大塚 真琴	95.03.01 ~ 98.02.28

NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
B-16	ホンデュラス	養豚開発	93.05.15 ~ 98.05.14	伊藤 政美 伊藤 政美	96.07.02 ~ 98.05.14
B-17	ブルガリア	はっ酵乳製品開発	97.07.01 ~ 02.06.30	岩倉 桂栄	97.07.02 ~ 99.07.01
合計		8か国		9プロジェクト	

3. 農業総合試験場、園芸総合試験場

中近東、アフリカ、中南米、東欧地域（グループB）三農試分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
B-33	ボリヴィア	ボリヴィア農業総合試験場 (CETABOL)	70.04.01 ~	小林 泰之	97.10.17 ~
B-34	パラグアイ	パラグアイ農業総合試験場 (CETAPAR)	62.08.01 ~	太田 光彦	97.02.19 ~
B-35	アルゼンティン	アルゼンティン園芸総合試験場 (CETEFTHO)	77.04.01 ~	遊佐 健輔	94.08.17 ~
合計		3か国		3プロジェクト	

4. 林業分野のプロジェクト

アジア、大洋州地域（グループA）林業分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リーダー等氏名	派遣期間
A-30	インドネシア	熱帯降雨林研究 (III)	95.01.01 ~ 99.12.31	森 徳典	98.01.10 ~ 01.01.09
A-31	インドネシア	森林火災予防	96.04.15 ~ 01.04.14	宮川 秀樹	96.05.21 ~ 98.05.20
A-32	インドネシア	林木育種 (II)	97.12.01 ~ 02.11.30	丹藤 修	97.12.14 ~ 99.12.13
A-33	インドネシア	マングローブ林資源開発現地 地実証調査 (開協)	92.12.01 ~ 97.11.01	井田 篤雄	97.09.01 ~ 99.11.01
A-34	中国	福建省林業技術開発F/U	91.07.01 ~ 98.06.30	坂上 幸雄	95.06.27 ~ 98.06.30
A-35	中国	寧夏森林保護研究	94.04.01 ~ 99.03.31	古本 忠	96.07.02 ~ 98.07.01
A-36	中国	湖北省林木育種	96.01.15 ~ 01.01.14	柴花 茂	98.01.06 ~ 01.01.14
A-37	タイ	東北タイ造林普及F/U	92.04.01 ~ 98.09.30	村沢 勝	95.06.20 ~ 98.09.19
A-38	タイ	未利用農林植物研究	96.08.01 ~ 01.07.31	小林 良生	97.06.29 ~ 99.06.28
A-39	ラオス	森林保全・復旧	96.07.16 ~ 98.07.15	五百木 篤	96.07.16 ~ 98.07.15
A-40	ネパール	村落振興・森林保全	94.07.16 ~ 99.07.15	柳原 保邦	97.05.27 ~ 97.07.15
A-41	ベトナム	酸性硫酸塩土壌造林 技術開発	97.03.20 ~ 00.03.19	中林 一夫	97.03.20 ~ 00.03.19
A-42	マレーシア	複層林施業技術現地実証調 査F/U (開協)	96.11.01 ~ 99.10.01	坂本 進	97.03.01 ~ 99.10.01
A-43	パプアニューギニア	森林研究 (II)	95.04.01 ~ 00.03.31	野口 昌巳	95.04.10 ~ 98.04.09
合計		8か国		14プロジェクト	

中近東、アフリカ、中南米、東欧地域（グループB）林業分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リポーター等氏名	派遣期間
B-18	ケニア	半乾燥地社会林業普及モデル開発計画	97.11.26 ~ 02.11.25	ミシマ 三島 セイヤ 征一	96.05.18 ~ 98.05.17 (99.07.25)
B-19	タンザニア	キリマンジャロ村落林業(II) F/U	98.01.15 ~ 00.01.14	ノダ 野田 村直人	96.01.05 ~ 98.01.14 (01.01.14)
B-20	ブラジル	アマゾン森林研究	95.06.01 ~ 98.05.31	スズキ 鈴木 雅博	97.05.19 ~ 98.05.31
B-21	チリ	半乾燥地治山緑化	93.03.01 ~ 98.02.28	カネ 鶴田 和男	97.02.26 ~ 98.02.28 (98.03.01) (99.02.28)
B-22	パラグアイ	東部造林普及	96.04.24 ~ 01.04.23	アケチ 阿久津 雄三	96.06.19 ~ 98.06.18
B-23	パナマ	森林保全技術開発	94.04.01 ~ 99.03.31	タノ 高野 知恵	97.04.10 ~ 99.04.09
合計		6か国	6プロジェクト		

5. 水産分野のプロジェクト

アジア、大洋州地域（グループA）水産分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リポーター等氏名	派遣期間
A-44	インドネシア	多種類種苗生産技術開発	94.04.02 ~ 99.04.01	竹ノ上 池ノ上 ヒロミ 宏	96.09.16 ~ 98.09.15
A-45	ネパール	淡水魚養殖F/U	91.11.01 ~ 98.10.31	ヤマ 山田 祥取	96.11.03 ~ 98.11.02
A-46	タイ	水産物品質管理研究	94.04.01 ~ 99.03.31	サカ 素藤 セロ 正路	97.08.19 ~ 99.04.01
A-47	トンガ	水産増養殖研究開発F/U	91.10.02 ~ 98.10.01	サカ 菊谷 知賢	95.04.05 ~ 98.10.07
合計		4か国	4プロジェクト		

中近東、アフリカ、中南米、東欧地域（グループB）水産分野					
NO	国名	プロジェクト名	協力期間	リポーター等氏名	派遣期間
B-24	オマーン	漁業訓練	93.05.07 ~ 98.05.06	シロ 白鳥 オノ 善宣	95.07.06 ~ 98.05.08
B-25	トルコ	黒海水域増養殖開発	97.04.16 ~ 02.04.15	ハラ 原 シウ 士郎	97.04.16 ~ 99.04.15
B-26	モロッコ	水産専門技術訓練センター	94.06.20 ~ 99.06.19	ウチ 戸塚 シウジ 峻二	97.06.17 ~ 99.06.21
B-27	マラウイ	在来種増養殖研究	96.04.01 ~ 99.03.31	オオ 大橋 モト 元裕	96.04.01 ~ 98.03.31 (99.03.31)
B-28	モーリシャス	沿岸資源・環境保全	95.12.01 ~ 00.11.30	イハシ 石橋 ノブ 矩久	95.12.02 ~ 97.12.01 (98.12.01)
B-29	アルゼンティン	水産資源評価管理	94.12.01 ~ 99.11.30	チノ 千國 シウ 史郎	94.12.01 ~ 98.11.30
B-30	ポリヴィア	水産開発研究センターF/U	91.06.15 ~ 98.06.14	ハマ 浜濱 ヤス 靖	92.02.07 ~ 98.06.17
B-31	チリ	貝類増養殖開発	97.07.01 ~ 02.06.30	カネ 川村 和夫	97.07.01 ~ 99.06.30
B-32	トゴ	漁業訓練	96.04.01 ~ 01.03.31	フイ 福井 シウ 襄	96.04.01 ~ 98.03.31
合計		9か国	9プロジェクト		

(3) 会議詳細日程表

日順	月 日	時 間	内 容	備 考
1	1月28日 (水)			アジア・太平洋地域のプロジェクト・リーダー到着
2	1月29日 (木)	10:00~ 10:30~17:30	アジア・太平洋地域のプロジェクト・リーダー 出席登録・受付 【個別協議】 6 プロジェクト 3 プロジェクト 5 プロジェクト 【関連国内委員会】 2 委員会 1 委員会 3 委員会	【本部 7階東側 農業開発協力部 計画課 リーダー会議事務局】 【本部 13階東側 B会議室】 【本部 12階東側 B会議室】 【本部 13階東側 A会議室】 【本部 10階東側 プレゼンテーションA】 【国際協力総合研修所 大会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】
3	1月30日 (金)	10:00~17:30	【個別協議】 5 プロジェクト 1 プロジェクト 4 プロジェクト 1 プロジェクト 5 プロジェクト 4 プロジェクト 【関連国内委員会】 2 委員会 1 委員会	【本部 11階西側 A会議室】 【本部 13階東側 B会議室】 【本部 11階西側 C会議室】 【本部 11階西側 I会議室】 【本部 11階西側 B会議室】 【本部 10階東側 プレゼンテーションA】 【本部 11階西側 I会議室】 【本部 10階東側 プレゼンテーションA】
4	1月31日 (土)		(休日)	
5	2月1日 (日)		(休日)	中近東・アフリカ・中南米・東欧地域の プロジェクト・リーダー到着
6	2月2日 (月)	9:00~ 10:00~ 10:05~10:20 10:20~10:30 10:30~10:40 10:40~10:45 10:45~ 10:45~11:00 11:00~12:20 12:00~12:30 12:30~13:40 13:40~ 13:40~14:10 14:10~14:50 14:50~15:30	【農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議全体会議 I】 中近東・アフリカ・中南米・東欧地域の プロジェクト・リーダー出席登録・受付 【開会式】 1.開会 2.出席者紹介 3.主催者挨拶 4.関係各省挨拶 ①農林水産省 ②外務省 ③文部省 【農林全体会議-I】 1.会議日程など説明 2.平成10年度プロジェクト運営の基本方針について 3.平成9年度事業実績及び平成10年度事業実施方針 4.午前の部に対する質疑応答 【昼食】 5.関係事業部報告 (1) プロジェクトの経理 (2) 機材調達について (3) C/P研修について	【国際協力総合研修所 国際会議場】 農業開発協力部 計画課長 農業開発協力部 計画課長 眞鍋 副総裁 東農林水産審議官 塩尻企画官 武田海外協力官 農業開発協力部 計画課長 亀若理事 農業開発協力部長 林業水産開発協力部長 経理部 調達部管理課 研修事業部、筑波国際センター

日順	月 日	時 間	内 容	備 考
		15:20~15:50	(コーヒーブレイク)	
		15:50~16:30	(4) 専門家福利厚生について	派遣事業部技術者管理課
		16:30~17:00	(5) 開発調査、開発協力について	農林水産開発調査部
		17:00~17:25	6. 午後の部に対する質疑応答	
		17:25~17:30	7. 分野別分科会の討議テーマについて	農業開発協力部 計画課長
		18:00~	【懇親会】 理事主催	【国際協力総合研修所 400号会議室】
7	2月3日 (火)	9:30~12:30	【分野別分科会】 分科会Ⅰ「農民が利用可能な技術の開発・研究」 分科会Ⅱ「小口融資制度の活用による技術の普及」 分科会Ⅲ「住民参加による地域開発手法」 分科会Ⅳ「広域技術協力の展開手法」 分科会Ⅴ「プロジェクト間の連携をどう進めるか」	プロジェクト・リーダーなど (座長：各リーダー代表) プロジェクト担当課、関係事業部(調達部、 研修事業部、派遣事業部など)、関係各省 【本部 10階東側 プレゼンテーションA】 【本部 11階西側 A会議室】 【本部 11階西側 B会議室】 【本部 11階西側 GH会議室】 【本部 11階西側 I会議室】
		12:30~13:30	【昼食】	
		13:30~17:30	【分野別分科会】 分科会Ⅰ「農民が利用可能な技術の開発・研究」 分科会Ⅱ「小口融資制度の活用による技術の普及」 分科会Ⅲ「住民参加による地域開発手法」 分科会Ⅳ「広域技術協力の展開手法」 分科会Ⅴ「プロジェクト間の連携をどう進めるか」	【本部 10階東側 プレゼンテーションA】 【本部 11階西側 A会議室】 【本部 11階西側 B会議室】 【本部 11階西側 GH会議室】 【本部 11階西側 I会議室】
8	2月4日 (水)	10:00~12:00	【プロジェクト方式技術協力プロジェクト全体会議】	(企画部主催) 【国際協力総合研修所 国際会議場】
		12:00~15:00	【昼食及び移動】 (一部リーダー意見交換会参加)	
		16:00~18:10	【農林全体会議-II】	【本部11A~H】
		16:00~16:10	1. 意見交換会の概要説明	農業開発協力部長
		16:10~17:00	2. 分野別分科会検討結果報告及び討議 (10分×5)	報告者：各分科会座長
		17:00~17:15	3. 要望事項取りまとめ	林業水産開発協力部 計画課長
		17:15~17:40	4. 総括質疑	
		17:40~18:05	5. 会議総括	外務省、農林水産省、文部省、 眞鍋 副総裁
		18:05~18:10	6. 閉会の挨拶	林業水産開発協力部長
		19:00~20:30	【懇親会】 外務省経済協力局長主催	【外務省新庁舎】
9	2月5日 (木)	10:00~17:30	【個別協議】 6 プロジェクト 5 プロジェクト 4 プロジェクト 2 プロジェクト 4 プロジェクト 【関連国内委員会】 1 委員会 1 委員会	【本部 13階東側 B会議室】 【本部 12階東側 B会議室】 【本部 11階東側 プレゼンテーションA】 【国際協力総合研修所 203号会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】 【AICAF会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】
10	2月6日 (金)	10:00~17:00	【個別協議】 1 プロジェクト 1 プロジェクト 2 プロジェクト 3 プロジェクト	【本部 10階東側 プレゼンテーションA】 【国際協力総合研修所 大会議室】 【本部 13階東側 B会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】

日順	月日	時間	内 容	備 考
			【関連国内委員会】 1 委員会 2 委員会 2 委員会 1 委員会 1 委員会 1 委員会	【国際協力総合研修所 国際会議場】 【国際協力総合研修所 大会議室】 【本部 10階東側 アビニションルーム】 【本部 11階西側 I会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】 【ホール101A】
11	2月7日 (土)		(休日)	アジア・大洋州地域のプロジェクト・リーダー帰任
12	2月8日 (日)		(休日)	
13	2月9日 (月)	10:00~17:00	【個別協議】 2 プロジェクト 5 プロジェクト 2 プロジェクト 1 プロジェクト 【関連国内委員会】 1 委員会 2 委員会	【本部 11階西側 H会議室】 【本部 11階東側 パレションルーム】 【本部 11階西側 G会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】 【本部 11階西側 GH会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】
14	2月10日 (火)	10:00~17:00	【個別協議】 2 プロジェクト 5 プロジェクト 1 プロジェクト 【関連国内委員会】 2 委員会	【本部 11階西側 H会議室】 【本部 11階西側 G会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】 【本部 7階東側 農開会議室】
15	2月11日 (水)			中近東・アフリカ・中南米・東欧地域のプロジェクト・リーダー帰任

平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議日程表

(農業技術協力課)

日 時	8:30	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00	16:30	17:00	17:30	18:00	18:30	19:00	19:30	20:00	20:30
1/29 (木)	事務局受付10:00~ (アジア・太平洋地 域のリーダー対象)			個：シリウカ 植樹検査 (12B)	個：タイ チュアイ大学 (11G)	個：農業・植物検査 (本部内プロジェクト)	個：生活改善 (本部内プロジェクト)	個：74ピロ 農村生活改善 (12B)	個：74ピロ 土壌研究 (12B)																
1/30 (金)				個：タイ チュアイ大学 (11G)	個：農業生産 (11I)	個：タイ・初訪 農水統計(11I) 個：インドネシア 灌漑排水(11G)	個：タイ・初訪 農水統計(11I) 個：インドネシア 灌漑排水(11G)	個：74ピロ 農業統計 (本部内 11I)	個：74ピロ 高生産性稲作 (11G)																
1/31 (土)																									
2/1 (日)																									
2/2 (月)																									
2/3 (火)																									
2/4 (水)																									
2/5 (木)																									
2/6 (金)																									
2/7 (土)																									
2/8 (日)																									
2/9 (月)																									
2/10 (火)																									

注：「国」は国内委員会 「個」は個別協議

平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議日程表

(林業技術協力課)

日 時	8:30	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00	16:30	17:00	17:30	18:00	18:30	19:00	19:30	20:00	20:30
1/29 (木)	事務局受付10:00~ (アジア・太平洋地域のプロジェクトリーダー対象)																								
1/30 (金)	事務局受付9:00~(中 近東・アフリカ・中南米 東欧地域リーダー対象)																								
1/31 (土)	開会式・農林水産省主催 (国際会議 国際会議場)																								
2/1 (日)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/2 (月)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/3 (火)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/4 (水)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/5 (木)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/6 (金)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/7 (土)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/8 (日)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/9 (月)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								
2/10 (火)	農林水産省主催 (国際会議 400号室)																								

注：「国」は国内委員会 「個」は個別協議

平成9年度プロジェクト・リーダー会議日程表

(水産業技術協力課)

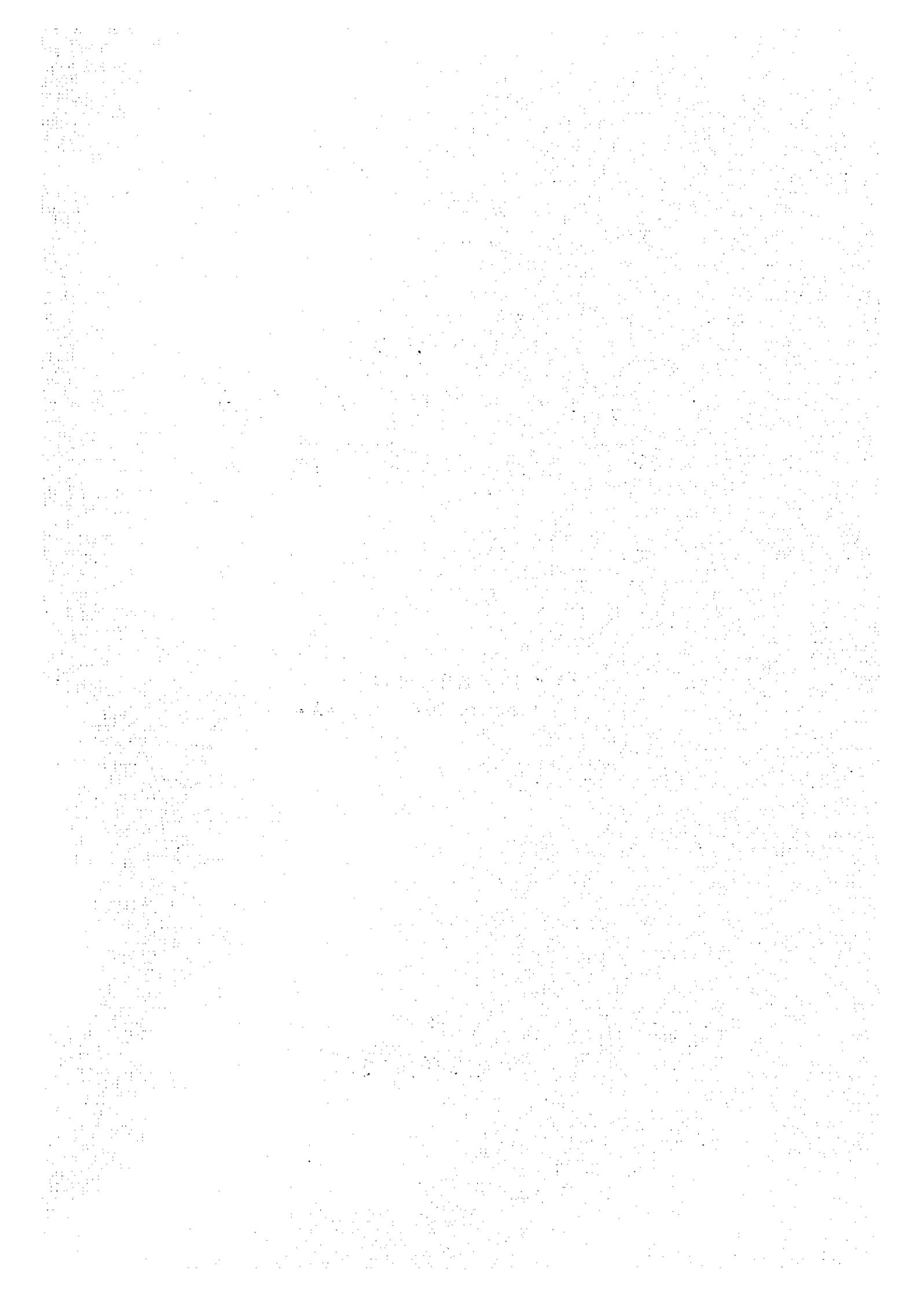
日 時	8:30	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00	16:30	17:00	17:30	18:00	18:30	19:00	19:30	20:00	20:30
1/29 (木)		事務局受付10:00～ (アジア・大洋州地域のプロジェクト リーダー対象)		国：インドネシア多様化推進員在席 (農開会議室)									国：ドガ水産増産技術研究開発 (農開会議室)						国：タイ・タイ水産資源評価 (農開会議室)						
1/30 (金)		※ 個別協議は アベノテラス10F東		個：ドガ水産増 産員									国：タイ水産物品管理研究評価 (アベノテラス10F東)					個：タイ水産加工 魚							
1/31 (土)																									
2/1 (日)																									
2/2 (月)		事務局受付09:00～ (中近東・アフリカ・中南 米・東欧地域のリーダー対 象)		閉会式・農林水産省 (本部11A～H)																					
2/3 (火)																									
2/4 (水)																									
2/5 (木)		※ 個別協議は 農開会議室 10F東		農林水産省分科会 (本部11C～I)																					
2/6 (金)		※ 個別協議は 農開会議室 10F東		プロジェクト 水産資源																					
2/7 (土)																									
2/8 (日)																									
2/9 (月)		※ 個別協議は 農開会議室 10F東		農開会議室 (農開会議室)																					
2/10 (火)		※ 個別協議は 農開会議室 10F東		農開会議室 (農開会議室)																					

注：「国」は国内委員会「個」は個別協議

**平成9年度
プロジェクト・リーダー会議
農林水産業協力全体会議－I**

平成10年2月2日(月)
於 国際協力総合研修所 国際会議場

国際協力事業団



(午前10時 開会)

1. 開会、出席者紹介、主催者あいさつなど

—開 会—

【齊藤農業開発協力部計画課長(司会)】 皆さんおはようございます。時間になりましたので、平成9年度農林水産業分野のリーダー会議、全体会議を開催させていただきます。

—出席者紹介—

【司会】 開会式に入る前に、東京側の出席者、主な来賓の方、役職員について御紹介させていただきますと思います。

まず、農林水産省農水審議官、東審議官でございます。

外務省経済協力局技術協力課、塩尻企画官でございます。

農林水産省経済局技術協力課、清水課長でございます。

文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室、武田海外協力官でございます。

続いて主な役職員の方を御紹介させていただきます。

国際協力事業団、眞鍋副総裁でございます。

亀若理事でございます。

小澤理事でございます。

神足参与でございます。

農開部、戸水部長でございます。

林開部、黒木部長でございます。

農調部、鶴見部長でございます。

菊池専門技術囑託でございます。

【司会】 それでは早速でございますけれども、開会式の方に移らせて頂きます。

—主催者あいさつ—

【司会】 主催者を代表いたしまして、国際協力事業団眞鍋副総裁にごあいさつを頂きたいと思っております。

【眞鍋副総裁】 御紹介頂きました眞鍋でございます。プロジェクト・リーダー会議の開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げたいと思っております。

本日は、皆様新年でお忙しいなかをこのように大勢集まって頂きましてありがとうございます。また、リーダーの皆様には、日ごろから我が国の国際協力の最前線で大変厳しい条件のな

かで御活躍を頂いておりますことにつきまして、心から御礼を申し上げます。

また本日は、農林水産省の東農林水産審議官を初め、外務省、文部省のそれぞれの関係官庁の方々にご出席を頂きまして誠にありがとうございます。目ごろからいろいろと御指導を頂いておりますことにつきまして感謝を申し上げますとともに、今後ともよろしく事業団の業務の推進につきまして御指導頂くようお願い申し上げます。

今回は第26回目のリーダー会議だと聞いておりますが、今回参集されたリーダーの数は37か国で82名だそうでございます。1箇所に参集された数としては過去最高の数になるわけですし、こうやって集まってみますと農林水産業協力の重みといいますか、大切さといいますか、そういうものをひしひしと感じます。

振り返ってみますと、昨年はODAにとりましていろいろなことがありました。ひとつには財政改革、我が国の財政状況が非常に厳しくなってきた状況のなかで、ODA予算もほかの予算と同様、あるいはそれ以上に削減という話が出てまいりまして、平成10年度からODA予算の10%カットが始まることになったわけです。更には、それとも若干関連するのだと思いますが、ODAのあり方につきまして、非効率であるとか、あるいはあまり発展途上国の役に立っていないのではないかと、もう少し効果のあがるやり方をいろいろ工夫すべきであるというふうなさまざまな議論が起こってきておるわけです。これを受けまして外務省のなかにも今後の協力のあり方を検討する研究会のようなものができましたし、内閣でも協力審議会というふうなところでいろいろな議論が行われたわけです。このようなODA予算が10%カットという過去にない経験をするなかで、やはり我々の事業もひとつの曲り角に来ておるのではないかと、ということで、今後とも我々としてもいろいろと必要な意見を言いながら、またこの動きを注目していかなければならないと思っております。

更に、昨今では特殊法人の問題がございます。財政改革、あるいは行政改革の議論のなかで、特殊法人も非効率であるとか、もう少し縮小あるいは廃止すべきであるという議論が行われておるわけですし、JICAも例外ではありません。いろいろと効率化なりスリム化を図るべしという議論が行われておるわけです。ただ外務省初め皆様方がいろいろ御努力を頂きました結果、JICAにつきましては、国際協力、あるいは顔の見える援助は大事であるということが理解されて、今のところはそれほど大きな変革とか、廃止とかという議論にはなっていないわけですが、いずれにしましてもこういう動きにつきましては我々としても注意をし、かつまた適切に対処していかなければならないと思っております。

平成10年度の予算につきましては、先ほども申し上げましたように10%カットという方針が打ち出されたなかで、JICAとしましても初めてマイナス予算ということになったわけです。しかしながら外務省を初め皆様方がいろいろ御努力を頂きました結果、おかげさまで10%カットということではなく2%弱のカットという比較的軽微な削減ということでおさまったわけで

す。ただ、従来ほかへ計上されておりました、例えば自治省などへ計上されておりました技術協力の予算がJICAに計上されたとか、あるいはODAの予算のなかでOECSFに組み込まれていたものがJICAに移管された、そういうものも含まれておりますので、必ずしもその数字だけで軽かったと言えない面もありますが、いずれにいたしましても平成10年度は全体の-10%という基準に比べますと非常に軽微で済んだわけです。しかしながら、中身を見ると皆さんと直接関係するプロ技の予算が-3.9%、そのなかで農林水産業協力は-4.2%ということになっておりまして、かなり厳しい状況であるということを示し上げざるを得ないわけです。このように予算額が減るわけですが、さりとて農林水産業協力の必要性につきましては変わらないわけですので、数を減らすということが非常に難しいわけです。そういうことで、窮屈な予算運用を迫られることとなろうかと思えますけれども、いろいろと工夫を凝らしながら予算を効率的に執行していくということが必要になっていると認識しています。

ODAの動向につきましては、地球環境問題とか、貧困撲滅、女性の参加というものを重視しようという大きな流れのなかで進んできておりますけれども、先進国対途上国という単純な発想だけではなくて、発展途上国を組み込んだいわゆる南南協力というような複合的な形態の協力もやろうという方向になってきておりますし、また京都で昨年末に開催された地球温暖化防止会議に見られますように、環境に対する協力を重視していこうということがひとつの特徴であろうかと思えます。

本年10月には第2回のアフリカ開発会議(TICAD-II)が開催されるわけですので、アフリカに対して人づくりの支援を中心に、各国が協調して取り組むテーマを検討中です。アフリカに対する協力をいかにすべきか、アフリカに力を入れてやっていこうということがひとつの流れになっています。JICAのプロジェクトで育成したアジアの人材を活用してアフリカに協力をしていくという、アジア・アフリカ協力も検討し、実施に移していくことが大事ではないかと思っております。

また、農林水産業協力ということから見ますと、食糧の自給問題、あるいは環境保全の問題というものは密接に関係してくるわけです。食糧の自給は永遠の課題といえますが、人と食べ物と地球環境というこの3つが複雑に絡みあってなかなか解決が難しいわけですので、21世紀に向けてますます重要な解決すべき課題であると私は認識しています。しかしながら、一言でそういうふうにするのは簡単ですが、アフリカを初めアジアも経済水準が向上するに伴いまして食糧問題が深刻になってくるという状況もあるわけですので、世界的な食糧問題、環境問題というものは、これから大変重要になってくると思うわけです。経済が発展してまいりますと、アジアに見られますごとく人口が都市へ集中する一方で農村部が過疎化し、非常に貧しい農村が取り残されるという問題もあるわけですし、貧困問題は即農業食糧問題ということが出来るわけですので、この問題の解決につきましても、やはり我々の農林水産業協力が真剣に、また

緊急に効果的な対策に取り組まなければならない課題であると思っております。しかしながらなかなか難しい課題でして、一朝一夕に解決できるわけではありませんので、やはり相当腰を据えて真剣に取り組む必要があるかと思うわけです。本日お集まりの各リーダーの皆さん方からも積極的な提案を希望いたします。

今後の事業執行につきましては、先ほどの財政改革あるいは行政改革、特殊法人問題等々とも関連するわけですが、事業の効率的な執行ということにつきまして、JICA本部でも各機関の実施体制や仕事のやり方などにつきましていろいろと見直しを行っています。やはり今後はより効率的また適正に事業を執行していく必要があるわけです。

更にプロジェクトの実施にあたりましては、事前の調査を十分に行い、失敗のないような事業執行をやっていく必要があると考えています。また今後の案件形成に向けましても限られた予算でいかに効果的なプロジェクトをつくっていくかという観点から、いろいろな工夫が必要になってくると思っております。

最近のトピックとしましては、アジア地域で経済危機、通貨不安の問題が起こっております。これらにつきましては、アジアの相手国のローカルコストの負担が非常に難しくなるなど、プロジェクトにもいろいろと影響がでてきているのではないかと思いますし、物資の現地調達につきましてもコストの上がる面、下がる面、いろいろな面があるかと思えます。

どうか執行にあたりましては、世の中の動きを注視しながら、またリーダーの皆様には現場の実情を的確に把握して早目に本部の方へいろいろと相談をかけて頂きまして、円滑な事業の推進に努めていきたいと思っておりますので、よろしく願いをいたしたいと思います。

それから、いつも申し上げておるわけですが、昨年もリーダー始め専門家の方々の安全問題、病気の問題等々で、いろいろ不幸な事例もあったわけです。やはりこれは国情も違いますし、いろいろな病気なり、あるいは治安の問題等々あるわけですし、どうかリーダーの皆様方には関係する専門家なり関係の方々現地病気にならないように、また危険に巻き込まれないように、ひとりひとりが気をつけるとともにリーダーとして一層の気配りといいますか御配慮をこの際お願いを申し上げておきたいと思えます。どうかリーダーにおかれましては、御自身はもとより、御家族の方々、あるいは専門家の関係者の方々の健康管理なり安全確保につきまして一層の御努力をお願いをいたしまして、開会にあたりましてのごあいさつにいたしたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会】 副総裁ありがとうございました。

2. 関係各省あいさつ

【司会】 それでは、各省からお越し頂いているの方々から、ごあいさつをちょうだいしたいと思います。

① 農林水産省

【司会】 まず最初に農林水産省、東審議官お願いいたします。

【東農林水産審議官(農林水産省)】 ただいま御紹介にあずかりました東でございます。プロジェクト・リーダー会議、農林水産業協力全体会議開催にあたりまして、ごあいさつさせて頂くことを大変光栄に思います。

私は昨年、パラグアイのリーダー会議に出席させて頂きました。きょうまたこうしてそのときにお会いした皆さん方の顔を何人かここで拝見いたして、大変御苦勞が多いとは思いますが、大変お元気そうでうれしく思う次第でございます。また私はパラグアイの会議でいくつか協力サイトを見せて頂き、リーダーの方々のお話をうかがう機会を得ました。大変はつらつと仕事に励んでおられる状況を目のあたりにいたしまして、御苦勞は多いとは思いますが、大変うれしく感じておる次第です。

最近の世界の情勢並びに農林水産業協力関係の情勢についてまず述べさせて頂きたいと思えます。先ほど副総裁も触れられました世界経済の情勢、特に最近めだちますのはアジアを中心とした各地域における経済不安と申しましょうか、通貨不安を中心とした経済の動揺が見られることです。

あれだけしっかりした経済を確立していながら、現在一部の国では食糧問題を中心に大変な動揺を来しておるようでございます。それは、通貨の変動でそれぞれの国内通貨の対ドルないしは対円、外貨に対する切り下げが起こり、輸入食料品の大幅な値上げを来す。それがきっかけで、各国において買いだめの動きも見られ、食糧不安が起こっている地域がございます。例えばひとつはタイの場合ですが、我々も情報で聞いている限りですので、むしろ皆さんの方が現地におられてひしひしと感じておられると思うのですけれども、砂糖の価格が上昇しているため、砂糖の輸出を制限するというような動きが見られますし、インドネシアは、今エルニーニョの影響もありまして、600万トンぐらい米の供給不足が懸念されるというようなことを政府自身が伝えてきています。更に、一部の地域ですが、民衆が食料品店を襲うというような事態もあったようです。また、植物油の値上がりがあるとその買いだめに走り、それがパーム油の輸出を止めるという事態に発展しているというのが現状です。

このような経済動揺が来ますと、我々がかねてから心配していたように食糧不安の問題の1番大きな影響を受けるのがいわば下層階級です、社会不安を巻き起こす可能性があり、それぞれの国で最もその点について注意を払っているようです。こういう事態は我々がかねてから心配していたところで、一昨年のローマでの食糧サミットのときにも、アフリカ諸国を中心とした食糧不足、いわゆる多大な栄養不良人口に対する問題への取り組みと併せて、開発途上国はしっかりした食糧供給基盤をつくるべきである。農林水産業を中心とした協力をもとにして、

それぞれの国がしっかりした国内での供給基盤をつくるべきである。また、それに対する協力も我々はやぶさかではないというような意見表明をし、そのような方向が打出されてきたわけでございます。そういう意味での食糧安全保障というものを食糧サミットで確認しながらも、どちらかという急速な発展をしている国々は工業の発展に目を奪われがちであったと思われるわけです。しかしある意味では食糧自給を重視しておくということが、国の安定のために大変大事であるということをごの経済事情が示しているわけですので、リーダーの皆様にもそれぞれ任国でいろいろな政府関係者とお話があるときに、食糧安定ということをお話して頂くよう、御協力をお願いしたいと思う次第でございます。

これはひいては、我が国の食糧供給安定にもつながるわけです。世界的に不足を来しますと、貿易数量というものはある程度限界がありますので、例えばインドネシアが本当に、米が600万トン足りないというようなそういう状態だとすれば、世界全体で貿易されている米の量から考えて、一体どこから手当てするのだろうか。タイにそれだけ供給力があるか、それからベトナムにあるのか、中国の状況は今年どうなるのかということが大変心配になってまいります。特に今回のインドネシアの米の問題というのは、エルニーニョによる問題と、例の山火事に見られるような天候不順、特に今、雨期であるはずなのに乾燥状態であるために、重要な時期に差しかかっている米の生産が影響を受けそうだとということが背景にあるわけですが、我々日本としてもただごとではないという認識で、物事に取り組んでいかなければならないわけですので、そういう立場からも我々は農林水産業界関係の国際協力ということの重要性を痛感しております。

農林水産業界協力というのは、食糧の安定供給の確保ということのみならず、それぞれの国内資源の有効な利用、地域社会の発展にも貢献しております。例えばそれぞれの地域における持続的な農林水産業界の発展、又はそれぞれ地域の小農、零細漁民、貧困層に対する配慮というようなことも併せて協力を効果的に進めていかなければならないわけですが、更に最近の農林水産業界のひとつの大きな任務といたしまして、地域の環境、更に地域を越えたグローバルな地球環境への配慮などに対する密接な関連というものがあるわけですので、特に林業についてはその点が強く意識されております。そういうような状況のもとで、熱帯林の減少の問題、砂漠化の進行の問題、水産資源の枯渇の問題の対応ということも大きな貢献要素になっておりまして、昨年の地球温暖化防止条約の京都会議におきましても、森林の保全、造成が、温暖化効果のガスの削減のために重要であるということが強く認識されたわけですので、こういう点もひとつ大きなポイントとして協力を進めて頂きたいと思うわけです。

そこで、ここでいくつか農林水産業界協力プロジェクトを的確かつ円滑に推進して頂くための課題について、少し私どもの考え方をまとめて申し上げたいと思います。

まずひとつは、計画段階における適切なプロジェクトの形成ということですね。先ほど副総裁

からお話がありましたように、財政事情が非常に逼迫した状況にございまして、平成10年度予算では、ODA予算も削減せざるを得ない状況です。その効率的な使用ということが、まず財政構造改革の推進についてという政府文書のなかでも明確な方向を出されておりました、いかに効率的に実施していくか。今まで以上に効率的な協力を実施することが必要でして、そのための適切なプロジェクト形成を行っていかねばならないわけです。プロジェクトの要請背景、相手国の実施体制や期待される効果の実現可能性というようなものを十分把握するのは当然ですが、例えば地域住民や農業者のニーズを計画策定の段階から反映させていくような考え方を取っていくことがひとつの課題と考えています。またプロジェクトの実施にあたりましては、開発調査、個別専門家の派遣、無償資金協力、有償資金協力、食糧増産援助などのいろいろな協力スキームと総合的に連携を取って、協力効果をあげていくことも大事だと思います。また、先ほど副総裁からお話がありました南南協力の拠点整備という観点も、考えていかなければならないわけで、その場合には相手国だけではなくて、地域全体や国際機関との連携も考慮したプロジェクト形成が重要になっていくと考えております。

2つ目のポイントは、実施段階における円滑な運用ということでございまして。ここで特に重要なことは、専門家の養成確保の問題です。人が中心の技術協力ということでございまして、最近の案件の増大や対象地域の拡大に加えて、事業内容の多様化、高度化という状況が見られます。そのための専門家の確保、養成ということが技術協力を実施するうえで大変重要だと考えておまして、農林水産省といたしましても人材の計画的な派遣とその養成に一層努力していく考え方です。また、相手方の研修員の受入れも大事でして、農林水産省の各機関でいろいろな形で研修を受け入れているわけで、この経費も非常に厳しい状況のなかで、できるだけその拡充という形で対応したいと考えております。ある程度全体の応用力もありますので、各リーダーの方々が効果的な研修ということをお考え頂いて、研修員の送り出しをお願いしたいと思うわけです。

3つ目の問題は、プロジェクトの継続性ということです。御承知のとおりプロジェクトとして協力できる期間には限界がありまして、それぞれ一定の段階で我が国から移転された技術に基づいて相手国がみずから事業を継続していかねばならないわけです。そのプロジェクトの成果が相手国に引き継がれていくということを留意して頂いて、プロジェクトの実施段階から相手国政府との対話に努めて頂き、終了時にスムーズに引き継がれていくことを期待したいわけですが、また継続性確保の面から考えて、プロジェクトの実施途中での計画の変更が必要な場合もあるのではないかと考えております。

4番目ということで最後になりますけれども、最も重要な問題は、先ほども副総裁からお話がありました安全確保の問題です。皆様御承知のとおり昨年だけでもペルーの事件、スリランカ、ケニアなどの治安の乱れというものがございまして、ボルネオなどの山火事、それか

らインドネシア、マレーシアなど周辺国への煙害というような問題が発生しております。煙害のときには、日本人の御家族の方は東京へ引き上げて頂くということさえも一部あったと聞いております。更に、東南アジアの経済不安が、皆様が事業を実施中のサイトにおいて、いろいろと社会不安をかもし出す可能性がございます。このように大変安全性が懸念される状況ですので、その安全の確保に強く意をいたして頂きたいと思う次第です。我々といたしましても、外務省、JICAなどと連絡を密にして、安全その確保には細心の注意を払ってまいりたいと思っておりますが、やはり現地にいる皆様方がみずからの問題として常に心がけておいて頂く必要がある問題だろうと思うわけです。

ほかにも多々問題があろうかと思いますが、皆様の御意見をうかがいながら、当省といたしましてもできる限りのことをやっていきたいと思う次第です。第1線で協力に携わっておられる皆様の今後の十分な活躍をお祈りいたしまして、ごあいさつにかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 審議官ありがとうございました。

② 外務省

【司会】 続きまして、外務省経済協力局技術協力課、塩尻企画官お願いいたします。

【塩尻企画官(外務省)】 おはようございます。外務省技術協力課の塩尻でございます。本日は、平成9年度農林水産業協力プロジェクト・リーダー会議のために世界各地からお集まり頂きましたリーダーの方々に直接お目にかかっていろいろ御意見をうかがう機会が得られるということで、私どもも非常にうれしく思っております。本日は、これからの会議、またこれまで既に行われた会議で既に御発言があったと思っておりますが、現場の第1線で常日ごろ感じておられる様々な御意見、御感想、アドバイスなどお話し頂いて、今後の私どもの参考にさせていただきますと思っております。

日ごろから、文化や気候の異なる厳しい環境のなかで大変御活躍を頂いている皆様方リーダー、そして専門家の方々に対しましては、私ども外務省といたしましても日ごろから高く評価をして、国際協力の増進に貢献されていると感じております。また東京において御苦勞を頂いておりますJICA本部、それから専門家のリクルートからその後の技術的な支援まで絶大な御協力を頂いております農林水産省及び文部省の各省に対しましても、心より感謝申し上げます。

最近の我が国のODAをめぐる状況につきましては、既に副総裁、東審議官からもお話がありまして、あらゆる場で繰り返しお聞きになっておられると思っておりますが、特に予算の削減に代表されますように、かつてない厳しい状況になってきております。その一方で国際社会のグローバル化と相互依存の関係が一層進みまして、様々な問題が地球的規模の問題として重視さ

れるようになってきているなかで、ODAの果たすべき役割はますます大きくなってきております。

このような状況のなかで、農林水産分野への協力につきましては、外務省といたしましては、多くの途上国が農林水産業を主たる経済基盤としている現状におきましては、依然として重要な協力分野であると考えております。なかでも主たる地位を占めます食糧増産に向けた技術協力につきましては、一昨年に開催されました食糧サミットにおいても世界的な食糧安全保障の確保の重要性が言及をされましたように、もはや一国における貧困対策、栄養改善といった人道的側面だけではなく、先進国を含めた地球的規模の課題への取り組みとしてとらえられるようになってきております。

さきの国連環境会議の特別総会におきますISD構想に見られますように、様々な場で我が国として地球的規模での環境保全に対する協力を積極的に取り組む姿勢を表明しているなかで、熱帯林の減少や砂漠化の防止といった分野の協力についても、極めて重大な関心が寄せられているところでございます。

プロジェクト方式技術協力は、御承知のとおり各種形態を集大成した組織的、体系的な協力ではありますが、我が国の技術協力のなかでも中心的な存在でありますことから、これら課題解決に対する我が国の存在意義を世界に示していくうえでも、今後とも皆様方の御協力と御活躍を期待する次第であります。

私ども外務省といたしましては、農林水産分野のみならずあらゆる分野でいかに効果的、効率的にODAの協力を進めるべきかということを中心に常日ごろから考えております。本年度は、ODA改革懇談会も開催されたところでございますが、全般的に申し上げますと、いかに質の向上を図っていくかということになるかと思っております。そのためには、各種援助形態の有機的連携の促進、フォローアップの充実等々を、個々の課題に対する日々、不断の努力が必要と考えます。私たちといたしましては、皆様方とともに今後いかにして質の高い協力ができるかということを考えてまいりたいと思っております。

そのようななかで、今後リーダーの皆様方に期待される役割というものは、プロジェクトそのものの適切な運営はもちろん、そのプロジェクトの存在意義、今後の方向性についても常に頭のなかに置かれて、プロジェクト内外での相手国関係者との対話に努めるということなどを通じて、協力の効果をより高いものとして、相手国と我が国との関係を増進するための工夫も期待されているところでございます。

また、皆様方は現場の第1線でプロジェクトに携わるお立場ではありますが、さきに申し上げましたとおり、様々な問題がよりグローバルな視点で議論されるようになってきているところでございます。副総裁や東審議官からもお話がありましたが、是非とも国際的な動きに関心をより一層もって頂き、それをプロジェクトの運営のなかでどのように生かしていくかというこ

とを、今後とも一層意を用いて頂きたいと考えます。

いずれにしても、私ども東京におるものからいたしましては、この機会にいろいろと注文なり期待なりを申し上げますが、これは日ごろの皆様方の御活躍について理解をしていないということでは決してございません。私どもも同じ技術協力の仕事をやらせて頂いておりますので、各地に出張させて頂きまして、それぞれ周辺環境の厳しさについては実感しているつもりでございます。したがって、皆様方の現地での御苦勞につきましては十分承知したうえで、先ほど申し上げましたような、より一層の努力が期待されているということを申し上げたかったわけでございます。皆様方から今回の一連の会議のなかで忌憚のない御意見を頂きまして、私どもの参考とさせて頂き、東京サイドと現地サイドとがお互いに知恵を出し合いながら、今後より一層効果的な援助のために何をなすべきかということを考えていきたいと思っております。この会議が実り多いものとなりますよう、皆様方の御協力をお願い申し上げます。

最後に、この場をおかりしまして、技術協力を通じて途上国の人づくりに御尽力を頂いております皆様方の日ごろの御努力に改めて敬意を表し感謝申し上げますとともに、現地プロジェクトにおかれましても御健康に留意され、また御本人のみならずプロジェクトに携わる関係者皆様のリーダーとして、安全面、ほかの方々の健康面なども留意されながらますます御活躍されますようお祈り申し上げ、私のごあいさつとさせて頂きます。ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。

③ 文部省

【司会】 次に文部省学術国際局国際企画課武田海外協力官、お願いいたします。

【武田海外協力官(文部省)】 皆さんおはようございます。文部省海外教育文化交流室の武田でございます。文部省といたしまして一言ごあいさつを申し上げたいと思います。

本日お集まりの皆様方が、日ごろ各国各プロジェクトにおきまして御努力、御苦勞をされて、また活躍されていらっしゃることににつきまして、心から敬意を表したいと思っております。

近年、開発途上国からは、国づくりの基本となる人づくりににつきまして、そのソフト面での協力の要請が非常に増加している状況でございます。特に皆様方のような日本人専門家による途上国の人材育成、いわゆる顔の見える援助の重要性につきまして認識が各方面で更に増加しているような状況でございます。

今ほど副総裁を初め皆様からお話のございました平成10年度の予算編成につきましては、文部省も同様対前年度10%減ということで当初予算要求をしていたところでございますが、留学生の受入れなど発展途上国の人づくり関係の重要性に配慮して頂き、対前年度比8.1%ということで551億を計上できることになっております。またJICAが進めております技術協力関係につきましては、文部省におきましても専門家の派遣でございますとか研修員の受入れなどに

つきまして、国立大学を中心に協力を進めているところでございますが、特にプロジェクト方式技術協力につきましては、文部省関係者が65件に参画をしております、そのうち農林水産関係の分野におきましては30件を占める状況でございます。

このような協力を更に組織的に継続的に進めていくために、文部省におきましては農学、工学、医学、教育の各分野におきまして、国立大学の教官などの有識者による協議会を設置しております、更なる協力を進めたいと考えております。また、農林水産分野におきましては、国立大学農学部長会議の全面的なバックアップを受けておまして、JICAプロジェクトの対応などを協議しているところでございます。このような協力体制の整備を更に図っていきたくておるところでございます。

最後になりましたが、プロジェクトの皆様の御活躍により事業の当初の目的を達成されることをお祈りするとともに、リーダーを始めとする関係者の皆様方の御健康と任地における安全を心からお祈り申し上げまして、私からのごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。以上をもちまして、開会式を終了いたしたいと思っております。

—農林全体会議—

会議日程など説明

【司会】 それでは、全体会議に入る前にスケジュールを確認させて頂きたいと思っております。

皆様のお手元の資料Ⅱの12ページに、リーダー会議の詳細日程表がついてございます。個別打合せ、国内委員会などについてはそれで御確認頂きたいと思っておりますが、リーダーの皆様全体にかかわる部分だけ簡単に御説明させて頂きたいと思っております。

本日、午前中の部で、担当の亀若理事、それから農開部、林開部の両部長から、平成10年度プロジェクト運営の基本方針、平成9年度事業実績及び平成10年度事業実施方針などについて御説明させて頂きます。午後の部につきましては、関係事業部からの説明となっております。その後18時より、この同じ国際協力総合研修所の4階400号会議室におきまして、亀若理事主催の懇親会を予定しております。明日は9時30分から、本部の方で、5つのグループに分かれまして分科会を開催します。これにつきまして、後ほど補足説明をいたします。

2月4日は、企画部主催のプロジェクト方式技術協力のリーダー会議の全体会議が開催される予定です。一部のリーダーの方につきましては、引き続きJICA役職員などとの意見交換会がございます。また2月4日の19時から、外務省内の会議室におきまして、外務省経済協力局長主催の懇親会が開催される予定でございます。

【司会】 それでは全体会議の方に移らせて頂きたいと思っております。

3. 平成10年度プロジェクト運営の基本方針について

【司会】 まず最初に、事業の基本方針について、担当の亀若理事から御説明頂きたいと思います。

【亀若理事】 亀若です。皆さん大変お疲れのこととは思いますが、これからいろいろな場で皆さん方の現場のお声をお聞かせ頂くわけですが、最初に私の方から、担当理事として、日ごろから考えている事柄を少し申し上げさせて頂きたいと思います。

ODAをめぐる状況なり予算の問題、あるいは世界的な食糧の問題などにつきましては、先程副総裁あるいは東審議官からお話があったとおりですので、それとは重複しない形でお話をさせて頂きたいと思います。

これから私がお話し申し上げるかなりのものは、皆様方に今回それぞれの分科会に分かれて頂いて、そこで皆様方の現場の声としてもお話を頂くことが多いのですが、それだけ我々が日ごろ本部におりましても感じている課題でもありますので、むしろ私は問題提起をいたしますだけで、あとは皆様方からいろいろな話をおうかがいし、お知恵を拝借できればありがたいと思っております。

まず第1点は、プロジェクト間の連携の問題です。プロジェクト間の連携につきましては、私も運営指導という形で現場を何箇所か回らせて頂きまして特に感じた点ですが、同じ国に例えば同じ農林分野でプロジェクトがあっても、なかなかその間の連携というものができていないのが多いなという感じを受けました。ちょうど目の前に三島さんがいらっしゃいますけれども、例えば同じケニアで稲作のプロジェクトと林業のプロジェクトがある。片方でお米が造られているし、たまには物々交換でもやったらどうか。つまりお米の造られているところには全く木がない。せっかく有用な樹種を選定して、その苗木をその地域のプロジェクトの範囲内に配っているわけですから、少し離れたところへも物々交換で苗木を配ってもいいのではないかという素朴なことからの発想もあるわけですが、同じ国でありながら、なかなかこういうことが進んでいないのが多いなと感じました。一方ウルグアイでは、JICAの事務所はないのですが大使館が非常によくやってくださっておりまして、月例会と称して全部のプロジェクトの皆さんが集まって、JICA側の情報を含めましていろいろな情報を大使館の方からお話をし、またプロジェクトで問題になっている、あるいは困っている、生活面でのお話までそこで連絡会がもたれています。たまたまそのときにうかがったことがありまして、なかなかすばらしいなと感じました。こういうものをJICAの事務所が音頭取りをするなりして、身近なところから連携を考えていけばいいのではないかと思います。

それから、これはもちろん本部で相当考えていかなければならないことですが、縦割りの組織体制で動いている関係がありまして、例えば農業と林業との相互乗り入れをしたプロジェクト、これはいいかげん早くつくれという話をしているのですが、なかなかできない。私は常々日本の地下鉄の相互乗り入れのすばらしさというものを思っているのですが、あれだけ安全対策そ

のほかについて責任体制がきちっとしていなければならないあのシステムを相互乗り入れという形で見事にやってのけた、そのことによってどれだけ住民、我々市民が益しているか。すばらしいものがあると思います。会社が違っていてもそういうことができるわけです。農業と林業の所管は同じ農林水産省であるのだから、それができないはずはないと思っているわけですが、その辺はむしろこれからも本部としても相当考えなければならない問題だと思っています。ただ、最近ようやくアフリカにおいて医療協力との連携が取れ始めまして、農林関係で医療の先生を派遣するようになってきました。その先生から聞きましたけれども、ひところのJICAでは到底考えられない話だという感想を受けたことがあります。そういう動きも出始めていることは事実であり、今後ますますそういった面での連携が必要だと思っています。

それから、先々週の金曜日の理事会でもJICAの当面の課題として話されたわけですが、プロジェクト間だけではなくてほかの機関、今回のODA改革によりまして19省庁と言われていた体制が17に減ってきているわけですが、しかしまだ17の省庁が日本のODAを支えているわけですから、そういう面からいきましても、ほかの機関との連携も非常に重要になってくるかと思っています。そういう面では、今パラグアイで農林水産省の研究機関JIRCASとJICAとの連携プロジェクトがスタートをし始めています。更に、マラウイではFAOが今までやっていたところにヤドカリの形でうまく施設を使いながらプロジェクトを進めているというような例もあったと思います。予算が厳しいなかで質の向上を求められているわけですので、お互いうまく補完し合いながらプロジェクトを進めていくことは非常に重要ですので、今回も皆さん方の現場でのお声を特におうかがいしたいということでもあります。

第2点目は、受益する人々を念頭に置いてプロジェクトの運営をやってほしいということにあります。今回も農民が利用可能な技術開発研究とか、あるいは住民参加による地域開発手法といったことをテーマに掲げさせて頂いています。先ほどもお話がありましたけれども、一昨年の11月に開催された世界食糧サミットでは2015年までに現在の栄養不足人口約8億を半減させることを宣言しております。特にその結果として出てくる貧困対策に関連する社会開発プロジェクトとが非常に重要視されております。農林水産業関係はまさにその根底を支えるプロジェクトになるわけですが、ODAに携わる我々としましても、こういった問題について一層強力に推進していく必要があるなと考えております。

その際に、何と云っても基本になるのは技術だと思っています。最近社会科学の方々は技術はもう要らないのだというようなことを時々言われて私もびっくりしたことがあるのですが、そうではなくて要らないというのは近代兵器といいますか、ピカピカの日本の技術そのものを持ち込んでもしようがないということです。このことはヨーロッパ勢も相当手痛い反撃を受けているだろうと思いますが、このODAの世界でのテクニカルチームでいえば、いわゆる適正技術の必要性はだれも否定はされていないわけです。要はその国、その地域、それを使う人々

にできるだけ適合する技術、まさにそういうことを相手にオファーできる人こそが専門家だと私は思っております。そのままコピーでもって行ってそれをやれというのでは、これは専門家ではないと思います。特に農林水産の技術というのは、環境とか相手国の地域、あるいは住民、それにあわせてモディファイをしていってこそ農林水産の技術であって、そこは鉱工業と大きく違うところだろうと思います。それだけに難しい問題はあると思います。しかし、それなくしては到底相手に受け入れられるものにはならないと思います。

そこで問題になりますのは、途上国には欧米流の教育を受けた人が非常に多くて、特に皆様方のカウンターパートはそういう人が多いのではないかと思います。そういう人たちはえてして基礎理論、そして論文重視ということが多いように思います。途上国が今置かれている状況は、まさに焦眉の急として出てきていることは、生産に携わる人、あるいは農山漁村で生活する人々に裨益する技術というものを開発してそれを普及させることだというふうに思います。もちろん大学プロジェクトとか領域としては大きな幅をもっていることは事実であります、しかしその大学プロジェクトであっても、その成果ができるだけ早くその国の生活、その国のレベルを上げる、そういうものに裨益にするべきだろうと思いますので、どうかその地域の住民に裨益するということを常に念頭に置いて進めて頂きたいと思います。私どもが新規のプロジェクトを仕立てていくにあたりまして、できるだけそういったことに配慮して選定をしていきたいと思っております。

3点目は、先ほども出ておりましたけれども、本年の10月には第2回アフリカ開発会議が開かれます。ここにはアフリカでない地域の方もたくさんおられるわけですが、このアジアからアフリカへという流れは、なかなか止めようにも止まりませんし、またそうあるべきだと私も思っております。そういう面では、アフリカに対して日本の技術協力は本当に有効なのかどうかという視点で、昨年私はアフリカを回ってまいりました。アフリカは欧米人がかなり苦勞をし、手垢がついて、そして今や撤退しようというような状況もあちこちに見られます。果たして日本の技術協力がそこで生きるのかと思ったのですが、非常に安心したといえます。うれしく思ったのは、日本の技術協力というものは理論と実践とを伴った専門家の方々が行っておられるということです。これは日本ではあたり前ですが、欧米ではテクニシャンとレクチャーのような形に分かれて、マネジメントと実際にやることと全然違ったりするのですが、日本の皆さん方は一体で向こうのカウンターパートの方々に接せられる。そのことが彼らに日本の技術協力に対する信頼を生み出しているということを見てまいりました。そういう日本の専門家のもっているひとつの特性が向こうに生きるなということ。

もうひとつは、昨年、鳥根大学の若月先生らが書かれた論文が大来賞を受賞しています。私も通読しました。日本の里山をイメージして、その技術をアフリカでいろいろな情報を得ながら適用していくのが非常にいいのではないかと。しかもその姿は、東北タイでのいろいろな技術

協力の成果を持ち込んでいってもかなり有効ではないか。つまり今までのアジアの経験が日本人を通じることによってアフリカにも相当役に立つのではないかというふうな考え方で全体が書かれておりました。非常に感銘を受けておるわけですが、こういったことを考えますと、もう少し我々としても世界の安定ということから考えて、今後アフリカというものを、それこそアジアにおられる方々ももう少し考え、そしてまたアジアの人々で日本の技術指導を受けた人たちが、今度は第三国の専門家としてアフリカに行きたくてというようなことも大いにあっていいのではないか。タンザニアでは、あそこは牧畜の民と耕種の民とが分かれています。ところが、したがって家畜というものはあまり使わない。ところが、あそこで水牛を活用することを非常に熱心に進めておられる鯉淵リーダーがおられるわけですが、その水牛の使い方をインドネシアから第三国専門家として派遣してもらって、そして2人来てそこで水牛の使い方をいろいろ教えています。ただ単に水牛を使うということだけでなく、アジアの人たちの仕事ぶりといいますか物の考え方、そういったことを教育を受ける者という形ではなく、第三者がそこで実践することに伴うアフリカの人たちの驚き、そういったものが非常に出ておるようで、当初予期していた以上の成果があがっているなという気持ちも受けています。そんなようなことで、今年は相当アフリカということこれから考えなければいけないのではないかと思います。

第4点目は広報の重要性です。これは、昨年のリーダー会議でお話を申し上げ、皆さん方からもいろいろアイデアを出して頂いたわけですが、これにつきましてはもう1回申し上げておきたいと思います。特にプロジェクトの中身というものをいかに相手の国、そして日本にフィードバックさせていくかということは非常に重要だということです。例えば、これまた宮川さんがそこにいるのですけれども、昨年あれだけ日本でもインドネシアの山火事が問題になって、新聞、テレビを相当にざわしている。ところが、JICAは1年半前にインドネシアの山火事の早期発見のためのプロジェクトを送り出しているのです。ところが全くそういう情報が入ってこない。一体何をやっているのだと言って林閣部の尻を大分たたいたら、R/Dのときのプロジェクトの計画ぐらいしか反応としては返ってこない。こんなものではとてもじゃないけれどもだめだと言って、もう1度尻をたたいてようやくいろいろな情報が入り始め、そして日本の週刊誌にもそういったものが取り上げられ、面目を施したことがあります。

更に、これは調査団の帰国報告会だったと思いますが、私は大体そういうのに出ておりますが、ミッションが行って現地でのプロジェクトの状況を報告してくれるわけですが言っていることがさっぱりわからない。何とかの基準をつくりました。そしてこの工学的基準と生物学的基準とでこういった問題についてのマニュアルを作って、指標を作ってとか何とか言っていましたけれどもさっぱりわからなくて、私も技術屋ですけれども、とうとう耐えかねまして、爆弾を落としてもしょうがないので、「私はさっぱりわからん、あなたはわかっているのならそれ

でもいいけれども、もしあなたも聞いていてわからないなら、私のわからないところを質問しておいてくれ」と戸水部長に書き置きを残して途中で出たのです。それほど農林水産分野のプロジェクトで、理解できないような報告をやっておられたのに驚いたわけです。同じ穴のムジナだけで生活しているのならいいのですけれども、世の中そうではありませんので、くれぐれももう少し常識の立場に立って伝達することに努力をして頂きたいと思います。

私の与えられた時間は大体そんなようなことですが、最後にひとつだけ申し上げたい。これは時々理事会でも問題になりますので皆さんの方にもお伝えをしておいた方がいいと思います。最近送り出す際にリーダーを始め調整員の方々にもお話をしていることがあるのですが、「JICAる」という言葉があるのです。これは威張る、JICAであるということのを権威づけるといえますか、それを後ろ盾にしながら威張る。現場で日本人社会が非常に小さな社会のなかで動いている際に、これは安全性のため立派な、立派かどうか知りませんが一応の住宅に入らなければいけないとか、いろいろなことがある。それから長距離を飛ばす場合には、なかにはファーストに格上げして行って頂く場合もあるわけですが、そういった事柄をとくくと、これは特に奥さん方の問題が出てくるわけですが、日本人社会のなかでお話をいたしますと、民間企業の方からは非常に優遇されているとか、威張っているというふうな反響で戻ってくる場合があります。これは本当にばかばかしい話といたらばかばかしい話ですけれども、そういったこともあるということのを念頭に置いて行って頂きたいと思います。

きょうは大分辛口のお話をいたしましたけれども、報告書を作られる場合も、私が今申し上げましたようにあまり問題点ばかり書かず、いいことをうんと書いておいて、そのなかに問題点は入れておいてほしい。私は時間の関係もありましてきょうは少し問題点的なことを申し上げましたけれども、日ごろ気づいているということでお許し頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。

4. 平成9年度事業実績及び平成10年度事業実施方針

【司会】 次に、平成9年度の事業の実施状況、それから平成10年度事業実施方針ということで、来年度予算などの説明を含めまして、農業開発協力部の戸水部長、林業水産開発協力部の黒木部長、続けて御説明頂きたいと思います。

【戸水農業開発協力部長】 農業開発協力部長の戸水でございます。お手元の資料に基づいて御説明をさせていただきます。

主として平成9年度の実績と平成10年度の今後の取り組みについて御説明をしたいと思っております。その前段階と申しますか、先ほど副総裁それから理事からもお話がございましたけれども、JICAは特に農林水産業を中心として今どういう課題を抱えているかということの前段に説

明をさせていただきます。お手元の資料の1ページ目から、その辺をかいつままで御説明をさせていただきます。

初めに、これは予算上の点でございますけれども、先の臨時国会で財政構造改革法が成立いたしましたので、平成12年度まで、これは毎年、前年度予算を上回らないという形が決定されております。そういう意味では、ODAも過去右肩上がりで来ておりましたけれども、今後は非常に厳しい状況になる。そういう意味では、副総裁また来賓の方々からお話ございましたように、量から質へということが我々の取り組むなかで非常に重要なポイントになってくるということでございます。

そういう背景のなかで当面の課題といたしましては、先ほど理事からもお話ございましたけれども、ひとつは平成10年度は第2回のアフリカ開発会議(TICAD-II)が開かれます。そういう意味では、今後アジアからアフリカに軸足のある程度移す必要が出てくるとおられます。

そして、当面の1番大きな問題といたしましては、タイに始まりましてインドネシア、フィリピンなどに通貨不安が起こっております。本日も関係のリーダーの方々にはアンケートを取らせて頂いておりますけれども、場合によってはローカルコストの負担そのほかが問題になってきているというようなお話もございますので、これについてはより詳細にお話を聞かせて頂きながら具体的な対応策を検討してまいりたいと考えております。

JICAの組織面といたしましては、平成10年度に中央アジアのウズベキスタン事務所が認められましたので、中央アジアの農林水産業協力も今後視野に入ってくるということもひとつの動きでございます。

農林水産業協力の当面の課題といたしまして、特に農業畜産関係について御説明申し上げますと、先ほども出ましたけれども、地球的規模の課題と農業プロジェクトの役割ということで、多くの途上国は御承知のように農業を主産業としているわけでございますけれども、そのなかでも農民の多くは非常に所得が低いということが現実でございます。特にDACの新開発戦略、これは貧困問題の解決、それから地域格差の是正を大きく取り上げているわけでございますけれども、農業開発がこの2点から見ても非常に大きな重要な役割を果たすことになるのではないかと考えております。特に貧困の多くは都市及び都市周辺に居住しておりますけれども、結果論としては地方のキャパシティの不足、これは農業の開発が順調に進んでいけば地方にも住民が住めるということもございますけれども、そういう機会を増やすことが農林業開発の主目的ではないかと考えております。

案件の多様化と高度化ということでございますけれども、協力内容そのものは御承知のようにバイテクを使ったもの、それから知的支援という形でのソフト的なプロジェクト、それと地域にしましてもインドシナを初め東欧、アフリカ、そういう意味では非常に多様化、また内容

的にも高度化しております。そういうなかで私どもも、先ほど理事のお話もございましたように農民レベルに直接裨益が行き渡るようなプロジェクトを是非仕立てていきたいと考えております。

それと、先ほども理事のお話にもございましたけれども、単にプロ技だけではなくていろいろなスキームを使いながら、よりオールジャパンとして、場合によっては無償、有償との連携、またプロジェクトのなかでも農林という分野の連携、必要に応じてはそういういろいろなスキームを使いながらオールジャパンとしての力を発揮できるようなプロジェクトの形成に努めてまいりたいと考えております。

もうひとつ新しく出てきましたのは、6ページ目に少し書いておりますけれども、広域技術協力というものが昨年度から新しく、プロジェクト方式技術協力事業費のなかで認められたわけですが、ある地域に拠点を置きまして、その拠点を中心に周辺国へ例えば技術協力の巡回指導をすとか、こういう予算です。今後非常に予算の厳しいなかで、どこか拠点を置いて、そこを中心に周辺国を含んだ形の技術協力を展開するというのも視野に入れていきたいと考えております。これは、後ほど黒木部長の方からも御紹介があると思っておりますけれども、水産のカリブ海の域内協力というもので既に実施はしております。今後アフリカあたりでもこういうことを考えていきたいと考えております。

平成9年度の実施状況について、簡単に御報告いたします。

初めに研修員の受入れということで、これはJICA全体でございますけれども、7,700人強平成9年度12月まで実績がございます。そのなかで農林関係は1,070人ということで、13.8%を占めております。内容的には、一般の栽培技術のほかに、バイテク、水産の資源管理、マングローブの生態系管理技術などが研修コースとして設置されております。

次に専門家の派遣でございます。これは皆様方のプロジェクト協力以外の個別の形態も含んでどのぐらいいるかということでございますけれども、平成9年12月末現在では3,997人、4,000人弱の方が派遣されておられます。そのなかで、農林水産関係の専門家のウエートは1,259人で全体の3割を占めています。非常に重要な分野を占めているということでございます。

次に18ページのプロジェクト方式技術協力の関係でございますけれども、これは少し詳しく御説明をさせて頂きたいと思っております。

まず初めに23ページをあけて頂きたいと思っております。これが平成9年度の12月末現在の実施状況の一覧表でございます。この表で御説明を申し上げますと、通知予算は126億3,700万円でございます。プロジェクトの件数は96件で、新規が15件、継続が62件、終了が19件という形になっております。アフターケアは除いております。1番経費的にウエートの高いものは、専門家の派遣に必要な経費ということで88億3,200万円、専門家の方が長期は530名、短期が401名ということで931名の派遣をしております。あとはローカルコスト負担事業という形で、それ

ぞれ現地業務費の内訳を書いておりますけれども、ウエート的には専門家派遣経費が1番高いということでございます。

機材供与の額は25億6,300万円ということで、一般のプロジェクト協力としては90件、アフターケアが10件これに該当しております。

18ページに戻りますけれども、この96件といたしますのは、今まで農林水産業関係で実施した件数のなかで1番最高の数字でございます。これ以外にも、これは産業開発協力事業という形で、パラグアイの青果物流通の改善プロジェクトを実施しておりますけれども、これは除いておりますので、96件というのは過去に実施したプロジェクトの件数では、平成9年度が1番件数が多いということでございます。

全般的なことを申し上げますと、いろいろ各プロジェクトの皆様には窮屈な思いと申しますか、予算的には非常に厳しい状況でございましたので、一部機材の執行を平成10年度に回して頂いたり、現地業務費についても非常に節約を頂いたりということで、本年度非常に厳しい思いをして頂いて非常に申しわけなく思っておりますけれども、プロジェクトの件数が多いということと、専門家派遣経費の改定もあったということで、今年はそういう厳しい予算執行を強いられたということでございます。こういうなかでもいろいろ各プロジェクトに工夫を頂きまして、中堅技術者の養成研修とか、啓蒙普及活動が非常に積極的に実施されたということでは感謝を申し上げたいと思います。

各プロジェクトの現地業務費の内訳については29ページから32ページに全プロジェクトの現地業務費を参考までにつけております。これを見て頂くと啓蒙活動などプロジェクトがいかに農民レベルに浸透していくかということについて、現地で非常に工夫を頂いているというふうには私どもは理解しております。そういう意味では、厳しい予算のなかでこういう地道な活動をして頂いているということは感謝申し上げたいと思っております。

そのほかに関連事業として、19ページでございますけれども、青年海外協力隊の派遣事業がございます。このなかでも農林水産関係の隊員が600名強派遣されておりまして、比率的には17.6%を占めています。

20ページ以降の開発調査事業と開発協力事業については、これは午後の部のセッションで農林水産開発調査部の方から説明をして頂きますので、今回は割愛をさせていただきます。

平成9年度の事業実績のなかで、どういう案件が新規に立ち上がり、若しくは事前調査という形で派遣されたかというのが24ページでございます。まだ本年度3月に予定しているものもございまして、いくつか新規に立ち上げたものもございまして、これが24ページの進捗状況表という形でおつけしております。

次に25ページから27ページが、現在実施中のプロジェクトの表でございます。これは、先ほど申しましたように、平成9年度動いておりますプロジェクトの一覧表で、41か国96プロジェ

クトがこういう形で動いているという表でございます。

28ページは、アフターケアという形で動いているプロジェクトの一覧表でございます。11件、8か国で現在アフターケアを実施中でございます。

29ページから32ページまでは、先ほど申しました各プロジェクトで現地業務費をどういう形で予算的に使っているかという参考の表でございます。

次に、平成10年の農林水産業協力事業の予算について御説明をいたします。平成10年度は対前年度比4.2%減の121億6,800万円ということでございます。当初ODAは10%以上のマイナス要求でございましたけれども、外務省を初めとする関係当局のいろいろな御努力もございまして最終的には4.2%減にとどまっております。

35ページを見て頂きますと、事業団全体の予算の表がございまして。ちなみにJICA全体では交付金としてはマイナス1.6%ということでございますけれども、(5)のプロジェクト方式技術協力事業費としてはマイナス3.9%、この内訳は下の表に参考という形で載っております。このなかで、農林水産業協力に必要な経費が4.2%減という形で平成10年度原案が決められております。

プロジェクトの数は継続が83件、新規が14件、アフターケアが8件で、合計では前年度3件減の105件になっております。そういう意味では、件数が3件減で予算は4.2%減になっておりますので、例えば1件当たりの総事業費でいきますと、ほぼ平成9年度と10年度は同額程度という状況でございます。

10年の予算の1番の特色と申しますと、調査団の再編があったということです。これは39ページを見て頂きたいと思っております。内容といたしましては従来計画打合せ調査団と機材維持管理調査団というものがございますけれども、これを廃止いたしまして、プロジェクト運営指導調査団を新設する形になったということでございます。この39ページの従来方式と再編後の表を比較して頂くとわかりますように、従来1年目に計画打合せ、終了前に機材維持管理があったのですが、これをなくしまして、もう少し機動的に動ける形の調査団に再編したということでございます。少人数の調査チームということで団員の編成などが容易になりました。必要な都度、予期せぬ先方の組織変更とか、何か非常に重要な事項が起こったときにもプロジェクト運営のために迅速に対応できる形に再編されたものでございます。

36ページはJICA全体の予算の特色ということでございます。ひとつは実施体制の強化という形で、これはJICAの定員の問題でございますけれども、定割と増員を入れて4人の増が認められました。機構については、ウズベキスタンの事務所の新設が認められたということでございます。それから人的協力・実施基盤の拡充強化という面で、例えば研修員の受入人数が50人増えたというようなこともございます。プロジェクトとして非常に関係のあるのが3番目、4番目になろうかと思っておりますけれども、より効果的・効率的な技術協力の実施という形で、入

り口の強化ということで①から④までの調査が新規若しくは増になっています。それから、より多様なニーズに即した援助という形で、きょうもいろいろお話がございましたように、南南協力の支援ということで件数の増が認められております。5番目が国民参加の推進ということで、これはボランティア事業の充実ということで、例えば1年任期隊員の新規とか、そういうものが認められているという状況でございます。

37ページは、先ほどの説明とも重複いたしますけれども、プロジェクト方式技術協力事業予算の平成9年度予算、それから平成10年度の概算要求です。概算要求のときは先ほど申しましたように12.21%減でございましたけれども、最終的な査定としてはプロジェクト方式全体では3.9のマイナスになりました。そのうちの農林シェアは括弧に書いておりますけれども、32.76%という形になっています。プロジェクトの経費表を内訳としてつけております。

同じく38ページでございますけれども、平成10年度プロ技関係予算の要点という形で、1点目が先ほど申しました調査団の再編を表という形でつけております。事前調査、実施協議については、矢印の左側が平成9年度、右側が平成10年度でございます。したがって事前調査、実施協議については、事前調査は1件増でございますし、実施協議については新しい立ち上げ件数としては同じ件数でございます。

専門家の派遣に必要な経費の内容でございますけれども、これも金額的にはほぼ同額でございます。内訳といたしましては、長期の専門家の方が13人増、短期が25人減ということで若干中の入り繰りがございますけれども、金額的にはほぼ同額ということでございます。ただ、機材供与に必要な経費については31億8,000万円から27億円ということで、単純計算いたしますと1件当たり平成9年度は2,946万円ございましたけれども、平成10年度はこれも単純計算でございまして2,500万円ということで、約400万円減になっております。これが平成10年度予算の概要でございます。そういう意味では、金額的には同額でございますけれども、基本的な流れとしましては円安の傾向などございますから、現場で実際に実施して頂くには、平成9年度と比べましてタイトな状況も予想されますので、個々のプロジェクトの内容につきましては、この後予定されております個別協議でいろいろと御相談をさせて頂きながら、効果的な実施に向けて対応をしてみたいと考えております。

若干駆け足でわかりにくかった点もあろうかと思っておりますけれども、平成9年度の実績、平成10年度の予算の要点についての説明をこれで終わらせて頂きます。あとは黒木部長の方から林業水産関係について説明を頂きます。

【黒木林業水産開発協力部長】 林開部長の黒木でございます。皆様きょうは本当に御苦勞さまでございます。一通りの件につきましては農開部長の方からお話いたしましたので、私の方からはいくつかのプロジェクトを訪問させて頂いたなかでの感想などを若干述べさせて頂くことにしたいと思っております。

私は以前にフィリピンで調整員をやった経験がございまして、今回は林開部長の立場でいくつかの水産と森林関係のプロジェクト、またそのほかの関連について見せて頂いたなかで、プロジェクト方式技術協力はいろいろな面で改善されているとはいえ、本質的なところでは相当同じような悩みをおもちだなどということが実感でございまして。日本側のいろいろな協力のなかで、専門家の派遣であるとか機材の遅れ、研修員の選考などの問題について、いろいろとリーダーからお話をうかがっております。特に多いのはカウンターパートの配置、本来的に期待していたカウンターパートがなかなか配置されないというような問題、先ほどからも出てきておりますローカルコストの問題、これも今回の金融不安を抱えての地域は大きな課題になっておりますが、そのほかの地域においてもなかなかローカルコストをきちっと確保できないという問題については、途上国の支援を行ううえでのリーダーの方の大きな悩みのひとつであろうかと思つた次第であります。

ただ、先ほども亀若理事のお話にもありました、今のODAの改革の時期という意味では、評価をいかにするかということが非常に重要な時期に来ていると思つているわけですが、現場に参りますと大使館の評判は非常にいい、JICA事務所の評判もいい、相手国政府又はカウンターパートに聞きますと、非常に立派な成果をあげて頂いてということですが、専門家の方に言わせるとまだまだ御不満が非常に高い。リーダーの方に聞きますと、いろいろな面で、やはり先ほどのように相手方の期待から相当低い部分を何とかしてもち上げるという御努力のせいだろうと思つております。

そういうなかで、先ほども理事の方から言われましたけれども、よい点、いわゆるどこを伸ばすかという点を是非ともリーダーの方には自覚をして頂いて、その点を強く周りに対するセールスポイントにして頂きたい。また、林開部長は仲間内だということでもいろいろお話し頂いて、これは結構なことではございますけれども、是非ともそういう面で、例えば評価の報告なりを報告書にする場合に、やはりターゲットというものを掲げておるわけではございまして、そのターゲットにいかにして近づくかということでもいろいろ御努力を頂いてきている。そういうなかで、到達されたものを正當に評価して頂きたい。いわゆるできなかったことについての、死んだ子とは言いませんけれども、その年を数えるようなことはあまりしないで、やはり評価としますと何を相手に与えて何が相手の今後の発展の基盤になっていくのかということをやつて頂ければと思つているところであります。

それから、プロジェクトの終了に向けてでございますけれども、やはり専門家の方のレベルが高いということが非常にあるのかと思つますけれども、できなかったことを最後の1年なり半年なりでとにかくやつてしまおうというような強い意欲が時々見られるのですが、なるべくまとめあげていく、相手にいかにして定着させるかということにもう一度目を向けて頂ければと思つます。昔に比べれば、例えばフォローアップですとかアフターケアとかの制度もある

わけです。そういう意味で、ある一定レベルのところでは相手にハンドオーバーをしたうえで、そして次の経過を見守るといふようなことをある程度余裕をもちながらやって頂いた方が、最後まで走るといふことは非常に大変ではないか、ギリギリまで研究なりいろいろなものをつくりあげるといふことになりますと大変だなといふことを思っている次第であります。これはひとつ見たなかで、是非ともリーダーの方は周りの方を見て頂いて、評判を随分聞いて頂いて、立派な評判でございますので、その点自信をもって頂ければと思っていた次第であります。

プロジェクトの途中の運営などにおきましても、例えば政変などがあると目標に対しての相手方の投入は非常に困難になるところが出てくるかと思えます。そういう場合にもそれなりに到達地点の変更などを考えて頂いて、それが次のフェーズに結びつくかそれで終わるかは別にしましても、いずれ到達点について検討頂きたいと思っております。これについては、なかなか定着が難しい部分もございますけれども現在はPCM手法で、どのように評価するかを相手国と十分に話をしながらやることになっております。こういうことを御理解頂きながら、検討頂ければと思っているわけです。

先ほども出てきましたが緊急事態ということで、例えば昨年度のエルニーニョ関連での森林被害の関係、今年の金融問題などからの地域でのいろいろな騒動の問題などの懸念もあるわけでございます。そういうなかで、特に農村なり森林、漁村、これを相手にしますと、JICA事務所からも遠隔の地にあるプロジェクトが相当あるかと思えます。是非とも事前に事務所との御連絡などを図って頂いて、その時点になってまごつくことのないように、連絡などの体制、相談などは事前に密接にやって頂きたいと思えます。それでも緊急時にはリーダーの御判断をいろいろ仰ぐことが必要になってくると思えます。是非ともそういう面で日ごろからの連携、連絡を密にして頂ければと思っている次第であります。

最近の森林・林業関係について言えば、先ほども出ましたように熱帯林の問題でありますとか砂漠化の問題など環境問題との関連が非常に強く言われてきています。こういうなかで、地道な研究活動が問題の解決に結びついていくものだと思っておりますが、そういうなかで是非ともこれについての情報の本部への提供をよろしくお願ひしたい。極力他プロジェクトなり、また一般の人に対する情報提供を通じて、貢献度のPRに向けて活動していきたいと思っているわけであります。また水産関係につきましても、環境問題、資源問題に関係するプロジェクトが水産分野からも相当出てきています。こういうなかでいろいろな課題が出てきましたら、是非とも本部にも御相談頂き、また成果が出ましたら是非ともそのPRについてもよろしくお願ひ申し上げます。

世界的な森林の保全の運動でありますとか、熱帯林など環境問題についての関心も相当高まってきております。そういうなかで、できるだけ皆さんとの協力を図りながら対応していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

プロジェクトを訪問した感想と、PRについてのお願いを申し上げて、私の説明を終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。

5. 午前の部に対する質疑応答

【司会】 時間の関係で戸水部長、黒木部長の説明が省略されたところもございますけれども、ここで午前の部に対する質疑応答という時間を取りたいと思います。若干説明不足のところもあって、疑問をおもちのリーダーもあろうかと思しますので、積極的に御質問などちょうだいできればと思います。質問にあたりましては、挙手をして頂きまして、発言の前に国名、プロジェクト名、名前をおっしゃった後で御質問して頂くようお願いしたいと思います。それではよろしく申し上げます。

【三島リーダー(ケニア)】 ケニア社会林業プロジェクトの三島でございます。幹部のなかのいろいろなお話のなかで、アフリカ援助を重視していくというお話がございました。全般的に現地を受けている感じで言いますと、むしろ実態ベースでは逆のような印象を受けていますが、具体的にどういうことを考えておられるのか、そのあたりの御説明が頂ければありがたいと思います。ついでに言いますと、これは林業だけで言っているわけではありません。全般的にそのような印象を農業関係、ほかの分野でもそのような印象を受けています。

【黒木林業水産開発協力部長】 アフリカについて簡単に林業関係で申し上げてみたいと思っておりますが、確かに現段階でアフリカのなかでやられているプロジェクト、これを今どう考えていくかということで検討しているということで、具体的にアフリカについてどこをやるかについては、まだ具体化している部分ではございません。先ほどから話がありますようにアジア地域がある意味では卒業に近い国が増えてきた段階になってきたなかで、アフリカに対する協力の拡大をとすることは、ここ近年強く言われてきています。一方でアフリカにつきましては文化的にもまた言語面でもいろいろ課題があり、どういうところからアプローチしていくかなど、今後拡大していくための調査などを、極力積極的にやる必要がある。また、来年度も基礎調査などを出し、また他国での協力の状況などを掌握して、極力拡大の方向を考えていきたいと思っております。

【戸水農業開発協力部長】 農業分野で補足をさせていただきますと、アフリカのTICAD-IIというものが今後非常に大きな動きになってくるわけでございますけれども、農業分野の現在のJICAの取り組みといたしましては、平成9年度にガーナの灌漑稲作を中心とするプロジェクトをひとつ立ち上げております。来年度も象牙海岸で、現在これは外務省とも相談中ですが、計画中です。ただ、全般的に言いますと、林業分野もそうですけれどもアフリカからの要請がASEANあたりに比べて非常に少ないということが現状でございます。そういう意味

では、特にアフリカで御活躍のそれぞれのリーダー初め専門家の方々からも、当該国についてもう少し何か農林業の協力内容についてのいろいろな御相談などがございましたら、是非本部又はJICA事務所へ、いろいろと情報をお寄せ願いたいというのが私どもの心情でございます。よろしくお願ひしたいと思います。

【司会】 全体的な政策面の方針などを含めまして、技術協力課の塩尻企画官から補足説明を頂きたいと思ひます。

【塩尻企画官(外務省)】 各方面、また私どもの方から今後より一層アフリカへの協力を重視するのだということを言いながら、具体的にはまだ見えてこないということが御質問の趣旨だと理解しましたが、全体を見て頂ければわかりますが、ODA協力の50%前後がアジアへ行っている。私どもとしては、この日本とアジアとのかかわり合いということは基本的に変える必要はないと思ひています。ただ、アジア重視ということ为基础に置きながら、更により幅の広い協力、よりグローバルな形、世界を眺めた協力をしていきたいというふうに考えて、最近これまであまり日本が経験がなかったアフリカへの協力について、日本自身が考えていること、それから国際社会からの要請というか、DACにおいてもそうですし、いろいろなサミットにおいてもアフリカへの協力に対する日本への期待というものが高まってきている。私ども世界全体を眺めたときに、アフリカの開発をやらないと世界全体が安定しないという理解に立ってアフリカをやろう。これは、実は2、3年前からそういう考え方を私どものなかで議論をして徐々に浸透して、今アイデアづくりをしなから、去年の11月ですか、TICADの準備会合をやつて、ことし10月にはTICADの本会合、第2回のアフリカ開発に関する東京会議というものをやるわけです。ただ、日本の協力というものは、アイデアをつくつて計画をして、その予算を取つて実際に組織上動かしていつて、それが目に見える形になるまでには、結構タイムラグがあるのではないかと思ひています。基本的な流れとしては、アフリカにもう少し協力をしていく。もちろん皆さん御承知だと思ひますが、アジアをやめてアフリカという考え方はしておりません。今までの基本的な流れは決して間違つてはいなかつたし、それを基本に置きながら更により幅の広い、より世界を眺めた形の協力をしたいということです。三島リーダーはたまたま近所におられて、日本とケニアというものは基本的に今までアフリカのなかではODAの関係が非常に密度の高い国だと思ひていますが、これからほとんど今まで援助しなかつたような国も含めて、協力の可能性を探究しなからやっていきたいと思ひております。

もうひとつは、アジア諸国に既に技術移転をされた蓄積がありますので、これをアフリカ協用に活用できないかという考え方もしてあります。具体的な形になって目に見えた形になってくるには時間がかかると思ひますが、流れとしてはその方向で少しずつ着実に何か目に見える成果を将来つくりあげるための準備というか流れというか、そういうものが動いているというふうに私どもは理解をしてあります。以上です。

【司会】 農水省の清水課長の方からも御説明がございます。

【清水技術協力課長(農林水産省)】 農林水産省の技術協力課長をしております清水です。省の技術協力の窓口という形ですから、少しアフリカの問題について御説明をしたいと思っております。

アフリカの問題は、御存じのように今までも何回となくこの問題についてどう取り組んでいったらいいかということがあったと思います。そのたびにいろいろな考え方が出てきたのですが、先ほどありましたように今年度TICAD-IIの話があるとすれば、こういう話のなかで農林水産業協力も何かひとつの考え方が必要ではないかというふうに考えているのです。現在農林水産省のなかではアフリカの問題について、今までの経験を集めているいろいろ勉強しております。現在、農林水産技術会議の松本会長がケニア、タンザニアに入りまして、プロジェクト・サイトにおうかがいしていると思いますが、これもその一環であります。そのなかで今まで指摘されておりますのは、どうも今まで欧米諸国がやってきた農林水産業技術協力だけでいけるのか、そういうものをそのまま日本が受け継ぐという形ではちょっと難しいのではないかと、そういう感覚があります。したがって、日本がもっている日本らしさというか、日本の持ち味がよく生きていくような協力の仕方を見つけ出そうというのが基本的考え方です。したがって、先ほどJICAからも提案がありましたように、ある程度地域をまとめて拠点をつくるようなやり方、また、さっきありました日本とアジアの方たちが一緒になって何かやるやり方、そうした今までになかったような方式を編み出さなければだめではないかというのがひとつの考え方です。

もうひとつは、アジアのプロジェクトに注ぎ込んだような膨大な資金を、同じようにアフリカに注ぎ込むことが果たして日本の農林水産業にとっていいことだろうか。これがもうひとつのテーマでありまして、そういう意味では現在私ども考えておりますのは、そうした新しい方式をつくるとともに、成功例をたくさん積み上げたい、小さくてもいいから成功例を積み上げていく、こういう考え方が今必要ではないかということです。これにつきましてはJICAや外務省ともいろいろお話を申し上げております。そういう意味では、具体的なプロジェクトがどのように生まれてくるかは、これから今のような考え方を整理したうえで、各国に対して外務省、JICAから接触をして頂く。もちろん我々の方からもそれなりのいろいろ努力をしたいと思っておりますが、そのような方向ではないかと考えています。具体的にこれからですので、皆様から「そんなんじゃなくてこんなふうにやったらどうか」、「例えばもう少しプロジェクト範囲ではこの辺のところをつくらなきゃだめだよ」というような御意見がありましたならば、それはドシドシ言って頂いた方がいいと思います。そういう意味ではひとつの転機であると思っております。これはODA全体について言えることだと思いますが、アフリカについてはそう思っておりますので、皆さん世界から集まっていっぱいますからそれぞれの立場でい

ろいろお話ができるかと思しますので、よろしく御指導をお願いしたいと思っております。以上です。

【司会】 随分時間を取りましたけれども、今後のODAを取り巻く重要なテーマでございますので、今後ともリーダーの皆様のアドバイスなどをよろしくをお願いしたいと思います。

次の質問をお受けしたいと思います。

【鯉淵リーダー(タンザニア)】 質問というよりもお願いですけれども、今アジアからアフリカへということで心強いお言葉ですけれども、アフリカそのものも非常に多様でございますので、こういう機会をとらえてLLDCだけの分科会みたいな、タンザニアみたいに2年間もローカルコストが全く支給されないというようなことは、開かれた場所で論議するような話ではございませんので、同じ悩みのところで原則をつくっていく。かなり現地業務費というのは、かなりどころか生命線のように大事な予算になっておりますから、そういったことを共通な課題としてLLDC諸国だけの部門を何か設けられないか。そういったことを考えて頂ければ、皆さんで話し合うようなことでもないと思しますので、要望でございます。

【司会】 御要望事項ということで承っておきたいと思えます。実は、明日開催します分科会につきましては、初めて分野横断的といいますか、農開部、林開部のリーダーが交わって協議するというような設定にしております。来年度以降の分科会の計画の段階で、今の御意見なども踏まえたうえで計画をつくらせて頂きたいと思えます。

次の御質問を承りたいと思えます。

【早川リーダー(マレーシア)】 マレーシアの早川と申します。アジアからアフリカに行くのは大変結構だと思いますが、最近のアジアの経済危機というのはグローバルに見ても非常に大きな影響がありますし、日本にとっても大きな問題だと思います。マレーシアのマハティール首相に言わせれば、アジアが20年もかかってやっと発展してきたのが通貨危機でもとに戻ってしまったというようなことも言っておりますし、これからまた回復するには数年はかかるだろうということです。ですから、本日経済危機がどうプロジェクトに対して影響しているかというアンケートがありましたが、このときこそJICAの活動もアジアにもう少し政策的に見直す必要があるのではないかと思うのですが、具体的にこういう事態に対応して、JICAとして来年度予算などどんな対応を考えておられるのかをお聞きしたいのですが。

【司会】 戸水部長、お願いします。

【戸水農業開発協力部長】 先ほど申しましたように、総括的なことはいろいろ入ってきておりますけれども、国によってまた地域によって現状が違い、個々のプロジェクトを取り巻く環境というのは、カウンターパート機関によってもまた違ってきますので、今のところは画一的にこうだということは出ておりませんので、個別に御相談に応じて対応してまいりたい。JICAとしても非常に問題意識はもっておりますけれども、ではマレーシアはこうだ、インドネシア

はこうだという方針はなかなか今のところ出しにくい。最終的には個々のプロジェクトに御相談させて頂きながら対応していくしかないというのが実情でございます。先ほど申しましたように、これは個別協議などでも十分に現状をお聞きいたしまして、JICAも非常に厳しい状況でございますけれども、何とか目的が効率的にできるような形を取り組んでいきたいと考えております。

【司会】 よろしいでしょうか。では、どうぞ。

【坂本リーダー(マレーシア)】 マレーシアで複層林の実証調査に行っております坂本と申します。同じく今のアフリカへの協力への充実と申しますか、その件でございますが、アフリカにいたしましても南米にいたしましても、協力の内容が充実されていくことは好ましいことと思われまます。ただこれは、予算が右肩上がりするときには非常にうなずけることでございますが、先ほど外務省の御担当の方もアジア50%という基本的なスタンスは崩さずにアフリカへの支援を強化していくということですが、先ほどの御説明でODAの予算が減少傾向にあるなかで、アジアに50%のスタンスを置きながらある特定の地域への協力を拡大していくというのは何か論理矛盾があるような気がいたしますが、この点はいかがでございますでしょうか。

【司会】 それでは塩尻企画官、お願いします。

【塩尻企画官(外務省)】 そういう数字上のお話をされると確かに論理矛盾になるかもしれませんが、今ODAというのは、極端に言えば今までよりも少ない予算で今までよりも効果のある協力をやろうという、これも非常に論理矛盾のある話ですが、それをやろうということを考えて努力をしております。基本的な考え方としては、日本の戦略的な位置づけというか、そういうことから考えるとアジアとの関係を基本にするということは変わらないと思います。そういう意味で、今までそれが50%前後、時によっては40何パーセント台という、これはスキームによって差がありますが、基本的にアジア中心ということ据えながら、それだけアジアのボリュームは高いですから、アジアの1%、またはアジアのほんのちよつとしたところをそれぞれの緊急度に応じて、また必要度に応じて、今までとちよつと見方を変えてアフリカも眺めながらアジアも見るといふようなことをする。規模的にアフリカは今12~13%のシェアで、これは技術協力のみならず経済協力などを含めてのシェアですが、ほぼ日本のODAの半分を占めているアジアというものは当然今後とも基本にしながら、ちよつと体をずらしてより広い視野で見て、アジアもアフリカも視野に入れながら考えていく。確かに数字で計算上詰めていくとそれは矛盾と言われれば矛盾かもしれませんが、我々はそれができると思っています。アジアのほんのちよつとしたところを、例えば節約をしながらより効率的な活動をして経費を節減すれば、その分アフリカに行ったときに、アジアにおけるパーセンテージとアフリカにおけるパーセンテージとは相当大きな違いがあると思っております。これから人も物もどこの地域だってより一層必要とされる時期に、それぞれ身を削ってほかの新しいところを開拓していかなくてははいけ

ないというのは、これから皆さんに大変負担をかけるというふうに思って、私どもその負担の軽減をどうやって図るか腐心をしているのですが、そういう意味で何かこの会議を通じていろいろな御意見、アドバイスなどを頂ければ非常にありがたいと思います。いずれにしても、日本の国際協力というのは今まで以上により広い視野をもってやっていかなければいけないと我々は考えておまして、今後とも皆様の御協力、アドバイス、御意見などを期待したいと思います。

【司会】 そちらの方で挙手をされた方がいらっしゃいましたが。

【尾形リーダー(ウルグアイ)】 ウルグアイの尾形です。ウルグアイとはちょっと関係がなくてアジアのことですが、私自身は最初の3年間は学振から派遣という形で年に3週間ぐらいですがタイの大学へ行っていました。そのときにちょっと感じたのは、もうJICAで農業関係の大学に関する協力は終わりなんだとバンコクのJICA事務所で言われたことがあります。ですけども、その後非常に大きな問題が出てきているのです。私は実を言うと去年までずっと毎年ボランティアでタイへ行ってました。15～16年です。それから8年間スペインに行っていました。そういうことでいろいろな国の事情がかなりわかるのですが、国民性からいってタイの人たちは自分では絶対に要求しません。こちらがこういうのは要求しなさいよと言ってやっても、北の方にたくさんJICAの援助が入っているから今はできないとか、非常に遠慮してしまうようなことがあります。今でも僕の後輩たちが続けてくれているのですが、民間で自分の金を使って飛行機で往復して今でも援助していますけれども、そういうようなことも少し考えてやらないと、アジアの人たちを今度アフリカに目を向けて南南協力といいますか、そういうようなことを期待してもなかなか無理だと思います。そっちの方へ目を向けてやるぐらいにやはりJICAの職員というのか、立派な事務所がありますから、あそこの方たちがもう少し困っている問題やなんかを見つけるとか、東南アジアではタイが一番大きいのではないかと思いますし、周辺のことでもわかるでしょうから、やる必要があると思います。いかがでしょうか。

【司会】 では、戸水部長の方からお答えいたします。

【戸水農業開発協力部長】 なかなか今の御質問は難しい点はあると思いますけれども、ひとつ目は、タイで今後農業協力云々というお話がございました。これは外務省の企画官もおられますけれども、決してタイで農業協力をやめるということではない。ただ、今まで相当ASEANに比重がかかってきましたので、これ以上伸ばすかどうかについてはいろいろ議論はあるということで御理解頂ければよろしいかと思います。

もうひとつは、私どもJICAで今考えておりますのは、せっかくタイで農業協力のいろいろな分野がある程度花が咲き始め、それをやはり周辺国、ひいては先ほど理事からも御紹介がございましたけれども、タンザニアに例えば水牛の使い方についてこういうことができる、日本ではない技術が途上国ではあるわけがございますから、そういうものをもって、せっかくの

日本の技術協力の成果を第三国にまた生かすということも今後考えていくべきではないかという、この2点だろうと思います。そういう意味では、この2点は今後とも私どもの視野に入れて展開していきたい。アフリカでもし協力を今後ともいろいろ考える場合も、そういう視点も是非必要だということで御理解頂ければよろしいかと思えます。若干答えにならない点もあろうかと思えますけれども、そういうことでよろしくお願ひしたいと思えます。

【司会】 時間の制約もございますので、あと1、2点ほど御質問をお受けしたいと思えますが。

【阿久津リーダー(パラグアイ)】 パラグアイ東部造林普及計画の阿久津でございます。ODA予算の減少ということで、プロ技についても量から質への転換を図っていくというキャッチフレーズで御説明頂いているですけれども、意味はよくわかってはいるつもりですが、具体的に量から質への転換ということになるとどういうことになるのか。具体的なことがはっきりしないということで、ちょっと御質問したいと思えます。質になるというようなことになれば、ひとつのプロジェクトにとりましてはきめ細かな活動をより進めていくというようなことになりまじょうし、全体的にはより人手なり予算なりというものがかかる話になろうと思うので、全体的に見ればプロジェクトの選別が行われるのではないかということも感じますけれども、先ほどの10年度の事業計画を見ますと、そういうような数の面も1プロジェクト当たりの予算配分面も変わってないということなものですから、本部の方で具体的にキャッチフレーズに対してどういう内容を考えているのかということをお説明頂ければと思っております。

【司会】 では黒木部長の方からお答えします。

【黒木林業水産開発協力部長】 量から質へということで、ひとつのキャッチフレーズであります。これは予算の減少とか、そうでなくても多分いろいろと迫られる問題かと思っておりますけれども、話に出てきておりますように最初のプロジェクトの形成から始まりまして、やはり一層効率的なものというような話が1点であろうかと思えます。

2点目は、やはりほかの協力との連携と申しますか、例えば無償と有償などとの関連をいかにつけていくとか、それから先ほども出てきましたように横の連携、農林といかにタイアップをしていくとか、最近出てきておるような広域協力、これもまだ試行的な段階でありますけれども、そういうこれまでの経験してきたことを活用しながらよりワイドに見ながら内容を高めていくという努力をしていく必要があろうかと思っております。

【清水技術協力課長(農林水産省)】 これはJICAさんの方から言いづらいから私の方から言います。質を高めるということは、すなわち専門家の質を高めるということです。ということは、技術力と語学力の両方が高い人を送ってくれという意味です。私ども農林水産省に外務省、JICAから求められているのは、具体的には第1番目にきたのはそういうことであります。以上、簡単に要約してありますけれども、そういうふうにご理解して頂きたいと思えます。

【司会】 では、塩尻企画官お願ひいたします。

【塩尻企画官(外務省)】 専門家の質を高めるということで言えば今課長のおっしゃるとおりだと思いますが、私どもが考えているのは日本のODA全体のクオリティ・アップを図る、しかもより少ない経費をもってということで、実はメリハリをつけるということで、来年度の予算については相当あちこちで議論をされまして、増やすべきところは増やす、減らすべきところは減らす。例えば調査団の数を統合して、似たような調査団がいくつも出ている場合はもう1回見直して整理し直して、ひとつの調査団で同時に仕事ができるようなことをやってみよう。したがって、いろいろなスキームで調査団の数があつたものを全部見直して整理統合したうえで、全体としては削減をし、中身としては同じ仕事ができるような体制を取るとか、あとは今までやっていた個別の単独機材供与というスキームを来年度からスクラップしました。これは、実際にはフォローアップ事業費というものを新設しまして、個別の機材供与、単独機材供与ということだけではなくて、今までやっているいろいろなスキームの補完的な機材、いわゆる補完をするために機材をより効果的に使えるような形に組み直すというようなこと。これは、無償のやっていたフォローアップ経費も統合して、新たにひとつのスキームとして、しかも少し身を削ってより効果的に、今まで右肩上がりでどんどん増えていた時期には、いろいろなアイデアが出てきたときにそれをいろいろなスキームにして実行してきましたが、これをここで1回見直して、重複しているものはそれを避け、足りないところに補完をするという考え方で、全体の質的向上を図るということで、もちろんそのなかには専門家の方々の資質の向上ということもありますが、そのために何をしたらいいのかというようなことも我々関係各省の方々と協議しながら進めているところで、決して専門家の方々に集中して、何かそれだけが解決されればすべて質的向上が図られるのだというような考え方ではありません。全体のなかの一部としてそういうこともあるというふうに御理解頂ければありがたいと思います。ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。

これで全体会議、午前の部を打ち切らせて頂きたいと思います。活発な議論の展開に御協力を頂きましてありがとうございました。なお午後の部は、1時40分からこの場所で再開いたします。よろしくお願いいたします。

(午後12時35分 休憩)